

# 研究紀要 14

## 目 次

---

山梨における後晩期土偶の展開	新津 健	1
清里バイパス第1遺跡の陥し穴の若干の検討	山本茂樹	21
4基の前方後円墳の設計－山梨県における－	森 和敏	33
八代町瑜伽寺遺跡および山梨市七日子（廃寺） 遺跡出土遺物について	野代幸和・鈴木由香	47
甲斐における古墳時代中期の墓制について－曾根丘陵の円形低墳墓－	石神孝子	51

---

1998

山梨県立考古博物館  
山梨県埋蔵文化財センター

## 序

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターの日頃の研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第14号を公刊する運びとなりました。

今回は、計五篇の論考を収載いたしました。新津 健の「山梨における後晩期土偶の展開」は、山梨の後晩期土偶の実態を概観し、その変遷が土器型式にもとづく文化圏の変化と密接に結び付いていた可能性を示唆し、これからの土偶研究の方向性を提示しております。山本茂樹の「清里バイパス第1遺跡の陥し穴の若干の検討」は、本県において初めて広範囲にわたって陥し穴の調査が行われた清里バイパス第1遺跡より検出された縄文時代および中世以降の76基の陥し穴について調査担当者として考察を深めたものであります。森 和敏の「4基の前方後円墳の設計—山梨県における—」は甲府盆地東縁部に展開する4基の前方後円墳の築造企画について検討しております。野代幸和・鈴木由香の「八代町瑜伽寺遺跡および山梨市七日子(魔寺)遺跡出土遺物について」は当センターが1992年度に実施した古代官衙・寺院詳細分布調査の際に両遺跡から出土した資料を紹介したものであります。石神孝子の「甲斐における古墳時代中期の墓制について—曾根丘陵の円形低墳墓—」は、調査担当者として携わった岩清水遺跡を始めとする曾根丘陵の円形低墳丘墓の変遷と周辺の高塚古墳との関係について考察したものであります。

上記五篇の論考が考古学研究並びに埋蔵文化財の普及啓蒙活動の進展に少しでも貢献できるとすれば、望外の喜びとするところであります。

県立考古博物館と埋蔵文化財センターは設立されてから、今年で16年目を迎えております。山梨県における埋蔵文化財の調査体制と保護行政は大きく前進しましたが、なお課題の多い事も事実であります。今後とも努力をかさね、より一層の充実をはかる所存でありますので、些少にかかわらず、各位からのご教示と忌憚のないご批判を賜りますようお願い申しあげます。

1998年3月

山梨県立考古博物館館長  
山梨県埋蔵文化財センター所長

大塚初重

## 山梨における後晩期土偶の展開

新 津 健

- |              |          |
|--------------|----------|
| 1 はじめに       | 4 後晩期の土偶 |
| 2 後期前葉の土偶    | 5 弥生の土偶  |
| 3 後期中葉～後葉の土偶 | 6 おわりに   |

### 1 はじめに

山梨の土偶は、縄文前期中頃にはじまり中期、後期を経て晩期まで盛行する<sup>(1)</sup>。さらにその伝統の一部は弥生初期の容器形土偶や金の尾遺跡17号住居址出土の小型中実上偶に引き継がれ、終息する。

この間、特に中期には八ヶ岳南麓から甲府盆地を中心に地域性豊かな土偶が発達し、ことに駿遊堂遺跡にみるような大量に上偶を所有する集落も出現している。中期後半の曾利土偶とよんだものについては特にこの地域で生まれ発達し、その特徴の一部は長野はもちろん関東西部から石川、富山、岐阜、愛知にまで及んでいる。

このような長い流れの中で、土偶形態の著しい転換期もまた認められるところである。五体の表現豊かな立像形へと変わり、加えていくつかのタイプが出現する中期前半期はその最も顕著な時代と言えるし、容器形土偶の出現は土偶の変質のみならず縄文文化の終焉をも意味する転換期である。

このような大きな両期ではないものの、後期土偶の発生、展開はやはり山梨地域にあっては大きな変換期であったとみられる。それまで広い地域に影響を及ぼしてきた曾利土偶が消滅し、東北や関東にそれぞれ源をもつとみられる土偶文化の波に組み入れられることになるからである。

その後も後期中葉・後葉を経て晩期に至るまでも各地域の土偶文化と接触する中で山梨の土偶も展開してきているが、特に後期後葉以降は清水天王山式土偶のような山梨特有とでもいうべき形態をみることができる。

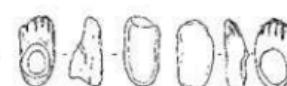
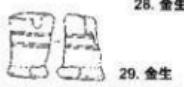
これまでにも山梨の後晩期土偶の集成を行ないその編年も一部では試みてきた<sup>(2)(3)</sup>が、それらをもとにして山梨における後晩期土偶の実態と変遷をつかむとともに、これからの研究方向を明確にしたいというのが小論の目的である。

### 2 後期前葉の土偶

称名寺式に伴う土偶は発見されていないが、堀之内式期になると土偶は急増する（第1図）。その主体はハート形系統とみられるが、多くは板状のものである。第1図2がその典型であり、顔面が体部と2カ所で接合するというこの類型の特徴を認めることができる。これは明野村水窪

	筒形系	板状ハート系
堀之内1式(2式) 期	<p>1. 上ノ原 2. 水底 3. 岩底 4. 青木 5. 犬神 6. 积道堂 7. 金生 8. 犬神 9. 青木 10. 上ノ原</p> <p>11. 青木 12. 犬神 13. 犬神 14. 金生 15. 金生 16. 金生 17. 金生 18. 金生 19. 金生</p>	<p>20. 犬神 21. 金生</p>
堀之内2式期		

第1図 後期前葉の土偶 (2.3を除き1/6)

	ハート系中実大形	ハート系中空大形
堀之内1式期	 <p>22. 豆生田3</p>  <p>23. 青木</p> <p>24. 上ノ原</p>  <p>25. 金生</p>	
		 <p>26. 金生</p> <p>27. 金生</p> <p>(新町タイプ)</p>
堀之内2式期	 <p>28. 金生</p>  <p>29. 金生</p>	 <p>30. 金生</p>  <p>31. 大月</p>  <p>32. 上ノ原</p>  <p>33. 清水端</p>  <p>34. 後田</p>  <p>35. 上ノ原</p>

から出土したもので、上向きかげんに突き出た顔やY字状の肩が特徴である。5や6もこの種の土偶であろう。加えて5のように円形の刺突で目や口を表現するのも壇之内式期の特徴である。体部は板状が多く、7では顔面が張り付いていたとみられる痕跡が残っており、2と同じ形態であったことが分かる。8～11も体部破片であるが、おもに沈線による渦巻き文が顯著である。このような板状タイプに加えて12のように完全に自立する厚みのある島名タイプのような形状もみられる。

脚部は3のようなO脚状のものが特徴であり、13～15、17～19などもこのタイプとみられる。ただ3については写真が鮮明ではなく、顔面の状況、文様、側面などの詳細が分からぬことから、より新しい段階のものかもしれない。16はO脚かどうかは分からぬが、円形刺突文については、東北南部の金田タイプや植木弘氏のいう筒形第1から第2段階<sup>(4)</sup>にみることができ、これらとの関連があるものとみられる。

以上のように山梨では植木氏が分類したハート形形式<sup>(5)</sup>のうちの郷原タイプのような典型的なハート形は見られないが、未発表ながら境川村金山遺跡からハート形の顔面をした土偶が出土している。

関東を中心に多く見られる筒形については、典型的なものは少ない。須玉町上ノ原遺跡出土の1は植木氏が内匠形式と呼んだもの<sup>(6)</sup>であるが類例は多くない。筒形上偶の顔面はハート形系統の顔面ともよく似ており、4や5では共通することがあり、筒形の可能性もある。ただし、山梨では今のところ典型的な筒形上偶の体部が出土しておらず、板状の体部が圧倒的に多いことから特に5についてはハート系列に入れておいた。

以上はほとんどが壇之内1式期のものと思われるが、さらにこの時期には22～25のような人型で中央の個体も認められる。ハート形の系列とみられるが、高根町青木遺跡の23は立体的でありしかも眉などの表現がこれまでのものとは異なっている。後頭部の丸味や頭部の体部への接合の仕方などは34等の新町タイプに類似しており、これにつながるものかもしれない。Y字状の肩ではないが、刺突により目や鼻が表現されており、しかも頭部の沈線などから壇之内古式のものと考えた。25～27は足の指がリアルに表現されている。このうち25は中央で、側面には沈線があり壇之内1式とみられるもの。26と27とは同一個体の左右をなす可能性のあるもので、中空とみられる。大きさは7cmから7.5cmを測ることから全身では20cmを越える土偶と思われる。未発表資料ながら石堂遺跡には腰から指先までが9.3cmという人型の足もある。また神奈川県東正院遺跡からも指表現のある大型の足が出土していることからも、壇之内式期にこのような土偶が盛行するようである。

壇之内2式段階でも1式期の様相は継続しており、20や21にみるようなハート系板状上偶を中心とし、28、29のような中実の大型土偶などもみられる。踏ん張った形態の28は比率からみると全身では20cm以下のものと推測できる。この28は加曾利B式の最新段階の金生遺跡4号住居から出土したものであるが、円形刺突と沈線による文様構成や形態からは壇之内式新段階ないし下ても加曾利B式古段階のものと考えた。この段階で30～35のような中空の大型土偶が出現する。いわゆる新町タイプである。後田遺跡出土の34からすると、腕や脚の形態とか肩や体部の渦巻き文な

どはハート形土偶の典型である郷原タイプと共に通する。顔面や体部との接合については郷原タイプとは異なり、特に丸味のある頭部はこの土偶独特の特徴である。大月遺跡出土の31は顔面を中心とした破片であるが、同一個体とみられる筒状の脚部破片も出土している。未報告ながら高根町石堂遺跡からもこの種の土偶が出土しており、山梨県内でも北伊勢から北都留郡域まで広範囲に分布している。新町タイプは宮下健司氏により長野県を中心に広がるとされているが<sup>(5)</sup>、山梨県下にもその中心が広がっていると言える。むしろ規模の大きい後期集落は、この種の土偶を普遍的に所有していたと考えたい。

33は明野村清水端遺跡の腹部破片、30は金生遺跡の顔面が剥がれたものであるが、このタイプのものとした。これらの時期については堀之内式の新しい段階から加曾利B式の古い段階とされてきたが、脚部の経文帯や体部の禍巻き文の状況、それにハート形土偶からの展開などを考えて堀之内2式の段階に位置付けた。

### 3 後期中葉～後葉の土偶

#### (1) 中葉の土偶

加曾利B式期になると、これまでの十偶とは相当異なった形態のものが主流となる。いわゆる山形土偶の系列にあるもので、第2図1が全身の分かれた典型と言える。これは高根町石堂遺跡から出土した全身11cmの小型品である。この特徴は小野正文氏が指摘したように<sup>(6)</sup>、ペンギンのような腕、腕から乳房に連続する隆帯表現、パンツ状の表現、という特徴の土偶であるが、それ以外にも、T字状に表現された眉鼻、耳飾りの表現された両耳、腰の張りが無くなつたずん胴短足などの特徴がある。また目の表現も堀之内期では刺突であったものがここでは斜線で表現されている。これらの性格のうち特に顔面の形態は後期後葉まで継続する。以上のようにこの石堂土偶は堀之内式期とは際立った違いがあることから山形系「石堂タイプ」と呼んだ<sup>(7)</sup>。1とよく似た顔面が3、4、文様こそ持たないものの共通したプロポーションにあるものが2であり、これらが石堂タイプと思われる。さらに胸の表現や文様からみると6と7も同じタイプとしてよからう。比較的小型の板状土偶にこのタイプが多いものとみられる。ところでここで注意したいのは、1や6の後頭部が突出していることである。さらに頭の後にもコブ状の突起がみられるが、これらの突出と突起についてはハート形土偶の頭部と体部とをつないだ橋状の接続部分の残存を考えたものである<sup>(8)</sup>。堀之内式期から加曾利B式期への継続性がわずかながら認められる特徴とも言え、加曾利B式期でも古い段階の土偶に多いものと思われる。このような特徴は9の後頭部、11や23の頭後などにも認められる。

第2図9～11は頭頂部が尖ったもので、文字どおり山形上偶である。  
しかし山形土偶の一つの典型である椎塚遺跡例<sup>(7)</sup>とはやや異なった形態であり、特にT字状の眉鼻の表現なども東関東と離れた地域性の強いものである。ただし10の都留市中谷遺跡のものは横に張り出した三角形の顔面形状や後頭部の円形膨らみなどの特徴を有しており、典型例に類似する。いずれにしてもこれら山形は県内では多くはないが、ここでは中谷タイプと呼んでおく。

これらのタイプの顔面表現に加えて、5や8のような顔面もみられる。5は石堂タイプからの

	山形系・他
加曾利B式期	<p>1. 石堂      2. 金生      3. 金生      4. 金生      5. 金生      6. 金生      7. 青木      8. 金生      9. 石堂      10. 中谷      11. 金生      12. 金生      13. 石堂      14. 金生      15. 金生      16. 水口</p>
曾谷式併行期	<p>17. 金生      18. 金生      19. 金生      20. 金生      21. 城屋敷      22. 石堂</p>
安行I・II式併行期	

第2図 後期中葉～後葉の土偶 (1/6)

## 山形系・他



23. 石堂



24. 金生



25. 金生



26. 金生



27. 金生



28. 青木



29. 青木



30. 金生



31. 金生



32. 金生



33. 金生



34. 金生



35. 金生



36. 金生



37. 金生



38. 金生



39. 金生

維続とみるべきであろうが、後葉期との関連もあり、ここでは加曾利B式期の終わり頃のものとしておいた。また8では目や口が隆帯で表現されているが、このような肥厚表現は千葉、茨城方面に圧倒的に多いものとされている<sup>(10)</sup>。11は中頃の物であろう。

23～31については顔面以外の体部を図示した。23は1と同じく石堂遺跡から出土したもので、1と似た腕や乳房を持つが腰がやや張り出しており石堂タイプとは若干異なる。また腕には円形のコブ状の張り付けがある。このようなコブは金生遺跡から出土した24、25にもみられる。26や27ではコブのかわりに細かい刺突がつけられている。これらはいずれもベンギンのような腕をしていることから、石堂タイプの上個の腕を含んでいる可能性がある。28～30では腰のあたりに鉛垂状文様がめぐっている。このような文様は東北地方および関東東部の後期中葉に多く<sup>(10)(11)</sup>、山梨では青木遺跡、石堂遺跡、金生遺跡など八ヶ岳南麓地域によく見られる。なお、この種の土偶は1のような石堂タイプとはことなり、腰がやや張り出すとともに両足を開くタイプのものである。全身が分かれるものが無いことからタイプ設定ができないが、少なくとも山梨に於ける後期中葉の土偶には山形土偶の系列といつても小型を中心とした石堂タイプ、山形の頭部を持った中谷タイプ、そして鉛垂状の文様を持った足を開くタイプなど複数の型が存在することになる。地域を異にする系統性や時期差を考えていくことが今後の課題でもある。

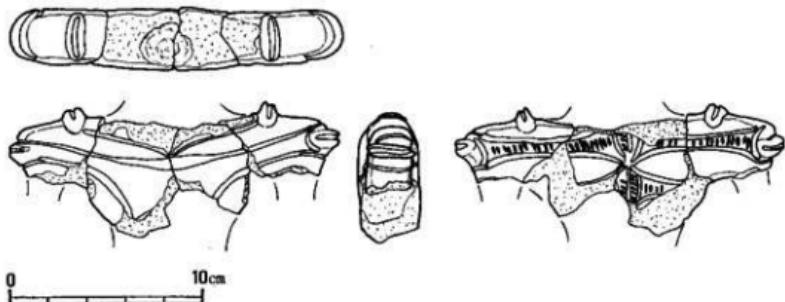
## （2）後葉の土偶

12～16、32～36は後葉前半の土偶と考えられるもので、上器型式ではおおむね曾谷式の段階とみられるものである。12～16は中葉期の石堂タイプ以来の伝統的なT字状をした眉鼻をなしている。12では耳の後に三日月状の隆帯、13では後頭部に三日月状をした円筒状の突起がある。14の後頭部は山形土偶のような丸く膨らんだものであるが、頭頂部の刻みや後頭部の膨らみは北陸地方の後期後葉～晚期前葉にも似ている。ここでは耳が三日月状の張り付け文により表現されていることから、後葉前半としておいた。15は金生遺跡から出土した波状口縁深鉢形土器の波頭部につけられた顔面突起である。表裏に表わされた顔面はT字状の目鼻であり、頬部も肥厚した表現である。16は境川村水口遺跡のものでT字状の目鼻ではないが額は肥厚しており、15に類するものとみられる。32のくびれから極端に張り出す腰の形状や腹部の膨らみは山形土偶の特徴もあるが、12や14のような刺突も多いことからこの段階とした。33から36は膝にコブがつくもので上野修一氏のいう瘤付土偶との共通性があろう<sup>(12)</sup>。

17～22、37～39は後葉後半としたものである。特に17、18は加曾利B式期以来のT字形目（眉）鼻とは全く異なったもので、隆帯によるハート形区画による、眉鼻頬まで一体となった表現の輪郭をなす。この形状は安行I式ないしII式期のみみずく土偶の顔面輪郭から影響を受けたものとみられ、山形系土偶の終焉を意味するものと見られる。特に18は曾谷式から安行I式の住居である金生遺跡6号住居から出土したものである。しかしながら19のようなT字形の目鼻を持つ土偶もまだ見られる。19、20は口唇装飾のある顔面であるが、このような装飾は北関東後期末から晩期初頭の土偶に見られ、その初源は東北後期に求められるとされる<sup>(13)</sup>。20は湾曲した眉であり、晩期に続くものとみられる。石堂の22は額が肥厚しており形状も16に似るが、後頭部に刻みがあ

るコブがあり、眉もいくらか湾曲することからこの時期とみなした。21も肩に刻みがある。これは西桂町城壁敷造跡からの出土品であるが、この遺跡からは後期後葉の羽状沈線を主体とする土器から清水天王山式土器までが出土している。

37の肩と38の腰には類似した突起があり同時期のものとみなした。特に37は金牛遺跡から出土したもので、報告書では3点の破片として掲載したが後に接合することが分かったものである。この3点は報告書<sup>(12)</sup>第103図1（E-3区包含層出土）、第104図7（D-4区包含層出土）、同図10（24号住居出土）である。接合後新たに実測し直したものが第3図である。両肩を含む胸部の破片で、右肩がD-4区、左肩が24号住居、胸部がE-3区から出土したもので、右肩と胸部とは近接した地点から出土しているが、左肩はそれらとは約50m離れている。肩幅は17.3cmを測ることから、全身では30cmを越える人形の土偶と思われる。中実板状であることから自立はしないものであろう。乳房部分までは残っていないが、恐らく文様の少ない面が前面と思われる。両肩の上と側面に、中央に沈線のある横長のコブ状の張り付けがある。土偶の背面には沈線と刻みの装飾がある。この文様を一部復元すると第4図1となるが、このような文様は東北の瘤付土器に類似したものがあり、これを第4図3～5（福島県三貴地貝塚出土例）<sup>(13)</sup>に示した。まず土偶の文様は弧線連結文の一種であり、これに刻目文が加わる。このような連結する弧線文は4に類似しているが、4では縄文が施されている。土偶と同様な刻目は5に見られる。なお金生遺跡からは2のような深鉢形上器が出土しているが、この文様も弧線の連続するものであり、小突起とかコブの位置や充填される縄文などの特徴を加えると3の上器によく似ている。三貴地の土器については3と4とが深鉢AIV類、5がBIV類と分類されており、三貴地貝塚コブ付土器を中心とした後期後葉上器群でのそれぞれ第3段階、第4段階に位置づけられている。安孫子昭二氏の編年ではこの第3段階が「コブ付土器第II段階」、第4段階が「コブ付土器第III段階」に位置付けられており、安行式との併行関係では前者が安行I式、後者が安行II式に対比されている<sup>(14)</sup>。これら安孫子氏や森氏の研究成果を参考にすると、第4図2や1の金生遺跡出土の上器・土偶の文様は、



第3図 金生の接合した土偶 (1/3)

「コブ付土器第II段階」の特徴を残しながらもこれに「コブ付土器第III段階」の特徴ともいべき刻目文が加わって形成されたもので、安行II式の段階に位置付けて良さそうである。

ところで、東北地方の土器文様が山梨型の土偶に付けられることは重要である。というのもこの地域には清水天王山式土器が展開しているが、この型式の形成に東北地方のコブ付上器が少なからずかかわっている可能性がある<sup>(15)(16)</sup>からである。清水天王山式土器の完成前夜の段階の土偶にコブ付土器文様がみられ、これが第5図1や2の土偶を経て9や10の清水天王山土偶へと展開していくものと思われる。清水天王山式土器については、安行3b式や3c式の段階では安行系の文様と共に通する要素が強くなっている。このような点から安行式土器圏外での土偶の形成に東北の要素が加わっており、同時に上器にもそれが及んで特徴的な型式が生まれ、やがて安行式の文様も取り入れていくという、文化圏の再編成にいたるまでの様相がこれらの土偶から読み取ることができる。

こうしてみると、加賀利B式期から曾谷式併行期までは山形土偶系として関東との共通性も高いが、安行式併行期では関東に確立するのみずく土偶そのものは山梨まで入ってくることはなく、山形系の身体に東北系の文様が加わるという傾向をみることができる。ここに安行圏内からもはずれ、しかも東北からの距離もへだつという山梨地域の特性をみることができる。

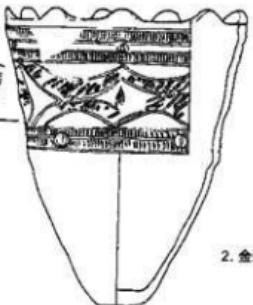
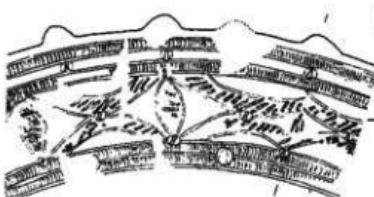
#### 4 晩期の土偶（第5図）

後期中葉がおおむね山形土偶系を中心としていたのに対して、晩期では各方面の様相があり、複雑な土偶の在り方を示している。その中でも晩期全体に展開するのが清水天王山式土器に伴う上偶であり、第5図9や11を典型とする。この土偶を清水天王山式土偶と呼び<sup>(17)(18)</sup>、第5図1～4を経て9～11に至り、清水天王山式土器が無くなった以後も12や13としてその特徴が残るという変遷をかつて考えたことがある<sup>(2)</sup>。その際にもふれたように9や11からみたこの型式の土偶の特徴として、①板状の立像形 ②腰から足にかけて直線的で、短い脚部 ③肩は張る傾向にあり、腕は短く外側に開き気味に垂れる ④肩の背面に円形瘤が横並びし、乳房もこの瘤に似る ⑤文様は主に背面にあり、入り組み文、入り組み三叉文、刺突文などがある ⑥顔面は湾曲眉で耳飾りがある 等を挙げた。

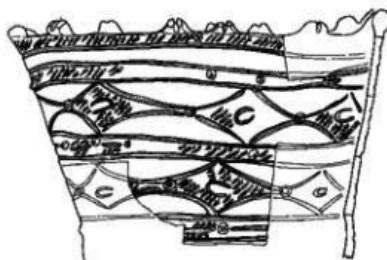
これらの特徴をさかのぼると、第5図1～3になると思われる。1ではやや張った腰と背面の文様が特徴であるが、特に腰の形状は後期後葉とした第2図38のような腰の突起に至るものとみられる。この38にも1と同じパンツ状の表現がなされていることも共通性がある。さらに38の腰のコブ状の張り出しが37の肩のコブと同じものであり、38と37とが同時期であることがわかる。すでに述べたように37の背面文様はコブ付上器と共通しており、この文様が第5図2に繋がっていく。この2および3では円形コブが並んでおり、これらがさらに9や11へと進んでいくものと考えられる。コブの特徴から見ると、中谷や尾咲原など都留市の遺跡から出土した9、11では一例に多く並ぶのに対して、金生遺跡から出土した4や10では大きめのものが2個ないし4個付けられている。なお背面文様については、入り組み文への展開となっていくが安行系とのつながりが濃くなっている結果とみられる。



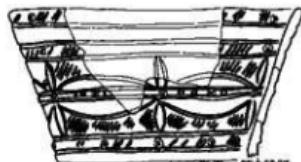
1. 第3回土偶文様の復元 (1/3)



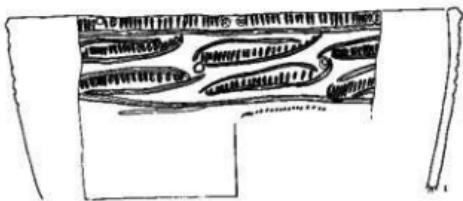
2. 金生



3. 三貫地 第3段階



4. 三貫等 第3段階



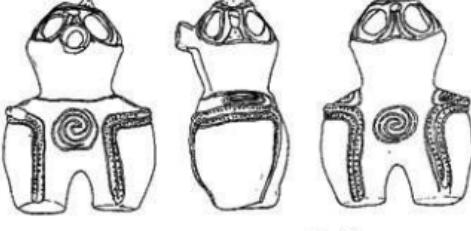
5. 三貫寺 第4段階

第4図 金生の接合した土偶の文様の系統

清水天王山式系

	<p>1. 金生</p> <p>2. 金生</p>
前葉	<p>3. 金生</p> <p>4. 金生</p> <p>5. 金生</p> <p>6. 金生</p> <p>7. 金生</p> <p>8. 金生</p>
中葉(古)	<p>9. 中谷</p> <p>10. 金生</p> <p>11. 月夜原</p>
中葉(新)→後葉	<p>12. 金生</p> <p>13. 金生</p> <p>14. 金生</p>

第5図 晩期の土偶 (11を除き1/6)

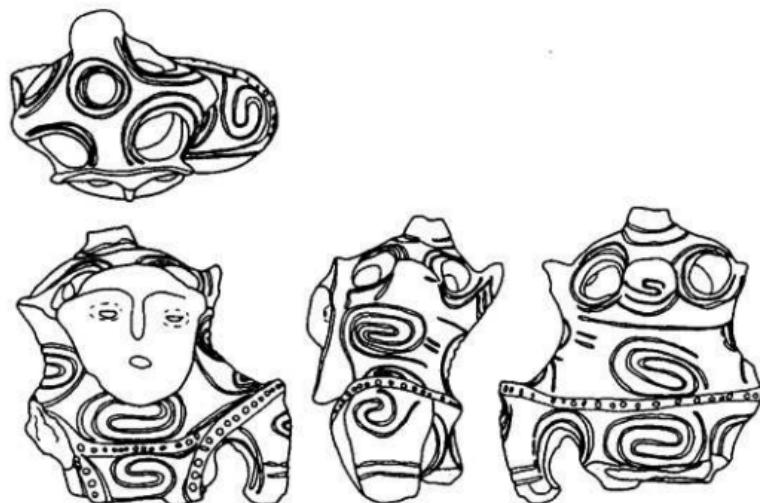
	その他の系統（北～西日本）	遮光器系
前葉	 <p>15. 金生</p>  <p>16. 金生</p>  <p>17. 金生</p>  <p>18. 金生</p>	
		 <p>19. 金生</p>
中葉（古）		 <p>20. 金生</p>  <p>21. 中谷</p>
	 <p>22. 金生</p>	 <p>23. 金生</p>
中葉（新）		 <p>24. 金生</p>  <p>25. 金生</p>
後葉	 <p>26. 金生</p>  <p>27. 金生</p>  <p>28. 金生</p>	

顔面については、5、6、9のように張り付けによる湾曲眉で、耳飾り装着が一般的なのである。9については顔面全体がハート状であり、第2図17や18に見る眉から頬にかけての形状に似ており、みみずく系と関連があろう。

10や11以降、清水天王山式土偶は12や13へと変遷していくものとみられる。

12は全体のよくわかる土偶で、顔面は相当省略されており、鼻の高まりがわずかに認められる程度である。再び腰が張り出してくるが、これは遮光器土偶系の影響であろう。乳房や膝は沈線表現。背面の渦巻き文は10から変化したものと思われるが、この初源は入り組み文である。このような渦巻き文は24や25と同じもので、晩期中葉でも新しい段階から後葉にかけての時期である。この段階は清水天王山式土器は消滅し、大洞C2式から氷I式へと展開する時期である。

以上のような清水天王山式土偶と平行して、他系統の土偶も散見する。まず遮光器系では19～25がある。金生遺跡から出土した19は、頬部のみが空洞となっている以外は中実の土偶で、目・頬・後頭部・襟元の三角状文様などは明らかに遮光器土偶の表現を受け入れている。頬頂部は欠損しているが王冠状の突起があったものとみられる。これらの特徴は晩期中葉の遮光器土偶につながるものであろう。20、21もこの流れを汲むものと思われる。さらにこの流れは無文ではあるが強い腰の張りとなって表現される22や、沈線文様で表わされる23、清水天王山式土偶に特徴的な背面文様を取り込んだ24などへと展開していくものと思われる。24では胸飾りや腰の陸帯に遮光器土偶の要素を残している。これらの系列の最後に金生遺跡から出土した25の中空土偶が位置付けられるものと考えている。この上偶については、これが出土した2号配石の時期や性格とと



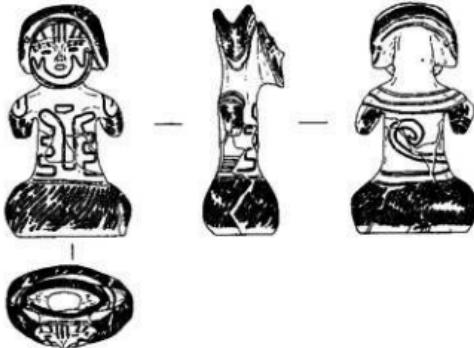
第6図 群馬県矢島遺跡の中空土偶（1／3）

にも検討したことがあり<sup>(16)</sup>、伴出土器から晩期後葉前半を最終とした中葉後半を中心とした時期とした。この土偶は極端な程に省略され顔面と腰部以下が強調されたものであるが、特に顔面の表現は特徴的であり、遮光器十偶の王冠状突起にその起源を求めるものである。これに非常に類似した表現が群馬県矢島遺跡出土の上偶に見られる（第6図）が、加えて渦巻き文、刺突を作う隆帯なども金生中空土偶と極めて共通している。矢島上偶は晩期中葉後半に位置付けられており、ここでも金生例とオーヴァーラップするが、省略された形態からみると金生例がやや新しいと思われる。いずれにしても遮光器十偶国外にあっての遮光器系の流れを汲む土偶ということになるが、山梨県北部の金生が群馬県東部の矢島とつながることは、東北南部一群馬一長野一山梨という文化ルートを考える上で重要な示唆が得られたことになる。

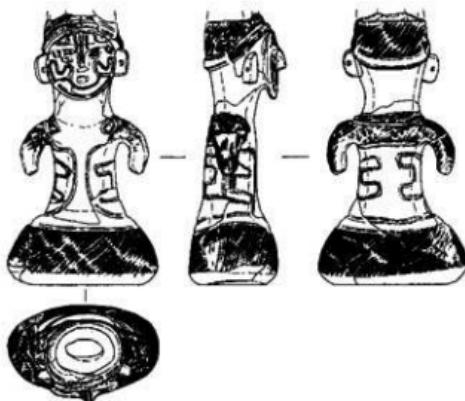
後葉期の特徴を持つ土偶には第5図28がある。これは顔面下端の破片であるが、浮線文で装飾されるものである。残存部の大きさからみて全身は30cmを越すものと見られる人形のものである。27の頭部の形態は福島県小和瀬の大形土偶や長野県福沢の土偶に似ており、さらには弥生初期の容器形土偶の頭部表現（第7図）に繋がるものと思われ、縄文文化最終段階の土偶とできる。26は形状からは前段階の腕の特徴を示しているが、さらに刺突が加えられており、後葉期の土偶とした。

## 5 弥生の土偶

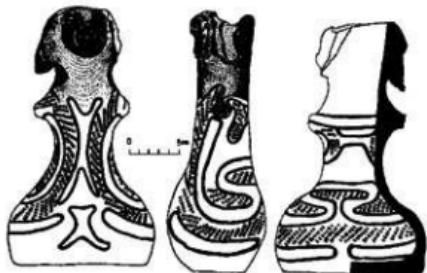
宮下健司氏は、容器形土偶を中部、東海、関東の水神平式土器分布圏内のものとされ<sup>(17)</sup>、その祖形を水1式および大洞A'の土偶に求めた。山梨では第7図1～3に示した2遺跡3体が知られている。1と2とは八代町岡の見晴らしのよい丘陵突端から出土した「一種の大姫土偶」<sup>(20)</sup>とされるもので、少量の骨片、骨粉、幼児の歯数個が併出している。3は韮崎市坂井から甕の中に納まった状態で出土したもの<sup>(21)</sup>である。この種の土偶は甲野勇氏により「容器的特徴を有する特殊土偶」と呼ばれた<sup>(22)</sup>もので、神奈川県中屋敷例では新生児の骨が納められていたという。蔵骨器とも呼ばれる所以でもある。形状からみるとこの土偶は、宮下氏が指摘したように縄文晩期後半の伝統を持つものであり、さらに加えると中実ではないものの福島県小和瀬の浮線文の土偶に非常に似ている。再生や豊穣を祈る縄文土偶の機能の内、再生を願う究極がこのような容器形土偶を生み出したものと考えられる<sup>(23)</sup>。このような「容器的特徴」を持つもの以外に第7図4のような小型で中実の土偶もみられる。これは敷島町金の尾遺跡17号住居から出土したものである。頭部を欠くものの体の形態は容器形土偶に共通し、沈線文様も1や2に類似する。17号は弥生後期の住居であり、この時期にまで土偶が残るのか、あるいは遺跡包含層からは条痕文土器も多く出土していることから、住居覆土の流れ込みに伴うものなのかは不明である。形態的には容器形土偶と同じであり弥生初期と考えたい。なお、この時期には東北地方では結髪形土偶が縄文の伝統を伝えているが<sup>(24)</sup>、これ以外にも福島県毛賀遺跡や電原遺跡からは金の尾タイプとプロポーションがよく似た小形の土偶が出土している<sup>(25)</sup>。特に毛賀例は有距系であり、容器形土偶とつながりのあるものであろう。縄文土偶の終焉をこれら弥生初期の土偶に求めることができるが、土偶がもっていた本来の意味を弥生文化がどのように解釈したのか興味深い点である。



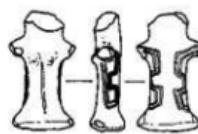
1.同



2.同



3.坂井



4.金の尾

第7図 弥生の土偶 (1/6)

## 6 おわりに

以上山梨の後期晩期の土偶の実際を概観してみたが、称名寺式期の土偶は見られないものの、堀之内式期以降晩期終末さらには弥生初期に至るまで、山梨では盛んに土偶が作られていたことが分かった。しかしこれらの土偶の系統は時期により相当異なっており、土器型式にもとづく文化圏の変化と密接に結び付いていた可能性が窺われる。

中期曾利上偶の衰退後、堀之内式期になると突如土偶が復活する。これはかつて栄えた曾利土偶とは全く様相が違っており、系統を異にするものである。ハート形土偶については東北南部や北関東を中心に関東・長野にまで広がるもの<sup>(2)</sup>であり、さらに福島などの東北南部を起源とする<sup>(2)</sup>とされるが、山梨でもこの系統の土偶が優越しその分布圏に組み入れられることになる。さらに堀之内式新段階では新町タイプが、長野・山梨に分布圏を持つようになり、ハート系の土偶も各地域で消化され地域性の強いものへと展開する。

加曾利B式期になると斎一性の高い山形土偶圏に組み込まれるが、この中でも地域性の強い石堂タイプや関東の色彩を強く残す中谷タイプ、さらには東北南部にも多い腰部に齶齒状沈線を持つタイプなどいくつかの類型が見られる。曾谷式併行期でも三日月状や円形の張り付けなどに關東地方との関係が認められるが、安行式併行期になるとみみずく土偶は全く見られず、あきらかに安行式文化圏からは外れ、それまで関係を保っていた関東とのつながりが弱くなってくる。ただT字形目鼻から湾曲眉への変化はみみずく系の影響と思われ、この状況を物語る顔面の輪郭を持つ土偶もいくつか出上している。しかしこの時期以降の土偶や上器型式の形成に大きくかかわったのは東北地方のコブ付上器であろう。この型式の文様を持つ土偶が金生遺跡に現れていることは重要である。晩期の清水天王山式上器および土偶へと展開する要素がこの時期に認められるからである。さらに後期前葉や晩期中葉とともに、東北南部一北関東一長野東部一山梨という伝播経路の想定がこの後葉という時期にも可能であり、この経路が山梨における郷文化形成にあっても大きな役割を果たしていたことが考えられる。

山梨晩期前半期の土偶の中心は清水天王山式土偶であり、晩期後半期にまでこの流れを認めることができる。中葉になると東北遼光器上偶系も入ってきており、中葉新段階以降にも影響を及ぼしたものと見られる。

晩期終末では氷1式の文様を持った土偶がみられ、さらに弥生初期にかけては容器形土偶が中部、関東、東海に分布し、山梨も新しい分布圏に組み込まれていく。

以上のような、時期により複雑な変遷を示す山梨の後・晩期土偶であり、この点からも周辺地域との関わりの中で、とらっていく必要がある。今回は山梨における後・晩期土偶の流れの概略をたどってみた試であるが、今後は各時期の土偶についての類型化を進める中で、土器型式とのかかわりを考慮しながら整理し、その系統をたどり変遷を組み立てて行きたい。最終的には土偶分布圏の移り変わりを明らかにしてみたいと思っている。

(註)

- (1) 小野正文 1992 「山梨県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』37 国立歴史民俗博物館
- (2) 新津 健 1993 「山梨における後晩期土偶」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- (3) 新津 健 1997 「八ヶ岳南麓の後晩期土偶」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1) 勉誠社
- (4) 植木 弘 1997 「筒形土偶の系統とその周辺」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1) 勉誠社
- (5) 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について～東日本の後期前半における三形式土偶をめぐって～」『埼玉考古』27 埼玉考古学会
- (6) 宮下健司 1995 「長野県における縄文時代後期の土偶」『長野県立歴史館研究紀要』I
- (7) 瓦吹 堅 1997 「山形土偶一椎塚貝塚の様相」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1) 勉誠社
- (8) 塚本師也 1995 「渡良瀬川・思川流域の諸様相」『関東地方後期の土偶（山形土偶の終焉まで）』シンポジウム発表要旨 「土偶とその情報」研究会
- (9) 浜野美代子 1997 「東北南部における山形土偶」一東北南部後期中葉から後葉にかけての土偶『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1) 勉誠社
- (10) 上野修一 1991 「北関東地方における後・晩期土偶の変遷について（下）」『栃木県立博物館研究紀要』8 栃木県立博物館
- (11) 植木 弘 1992 「安行期におけるみみずく土偶以外の土偶」『シンポジウム縄文後・晩期安行文化』発表要旨
- (12) 新津 健 1989 「金生遺跡」I (縄文時代編) 山梨県教育委員会
- (13) 森 幸彦 1988 「縄文時代後期後葉の土器群（IV群土器）」、「縄文時代後期後葉の土器について」『三貴地貝塚』 福島県立博物館
- (14) 安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式」～所謂「コブ付土器」の編年 『石器時代』9 石器時代文化研究会
- (15) 小野正文・奈良泰史 1989 「清水天王山土器様式」『縄文土器大観』
- (16) 戸田哲也 1980 「清水天王山式土器と晩期縄文土器の形成」『丘陵』8
- (17) 鈴木正博 1989 「安行式土偶研究の基礎」『古代』87
- (18) 新津 健 1983 「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』I 山梨県立考古博物館、山梨県埋蔵文化財センター
- (19) 宮下健司 1983 「縄文土偶の終焉」一容器形土偶の周辺一『信濃』35-8
- (20) 野沢昌康 1984 「甲斐・岡遺跡出土の容器形十偶」『山梨考古』14 山梨県考古学協会
- (21) 仁科義男 1933 「山梨県出土の石器時代土偶」『考古学雑誌』23-12
- (22) 甲野 勇 1939 「容器的特徴を有する土偶」『人類学雑誌』54-12
- (23) 新津 健 1986 「山梨における縄文文化の伝統と消滅」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会

- (24) 佐藤嘉広 1996 「亀ヶ岡文化終末期の土偶」『東北・北海道の土偶Ⅱ』シンポジウム発表要旨 「土偶とその情報」研究会
- (25) 山口 晋 1996 「福島県の土偶」『東北・北海道の土偶Ⅱ』シンポジウム発表要旨 「土偶とその情報」研究会
- (26) 上野修一 1990 「ハート形土偶」『季刊考古学』30 雄山閣
- (27) 上野修一 1997 「東北地方南部における縄文時代中期後葉から後期初頭の土偶について  
—ハート形土偶出現までの諸様相』『土偶研究の地平』土偶とその情報  
研究論集 (1) 勉誠社

(図の出典)

- ・上ノ原遺跡土偶 (第1図1、10、24、32、35) 小野正文 1995 「山梨県」『関東地方の土偶—山形土偶の終焉まで』土偶シンポジウム3 土偶とその情報研究会
- ・水窪遺跡土偶 (第1図2) 北巨摩郡教育会郷土研究部 1932 『先史原史時代調査』
- ・岩窟遺跡土偶 (第1図3) 末木 健 1983 『先史原始時代』『小瀬沢町誌』
- ・青木遺跡土偶 (第1図4、9、11、23、第2図7、28、29)  
雨宮正樹、山下孝司、柳原功一 1988 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』2 山梨県考古学協会
- ・姥神遺跡土偶 (第1図5、8、12、13、20,) 柳原功一 1987 『姥神遺跡』大泉村教育委員会
- ・駿迎堂遺跡土偶 (第1図6) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 1986 『駿迎堂1』
- ・金生遺跡土偶・土器 (第1図7、14~19、21、25~30、第2図2~6、8、11、12、14、15、17~20、24~27、30~39、第4図2、第5図1~8、10、12~20、22~28)  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集 1989 『金生遺跡』山梨県教育委員会
- ・豆生田第3遺跡土偶 (第1図22) 柳原功一 1986 『豆生田第3遺跡』大泉村教育委員会
- ・大月遺跡土偶 (第1図31) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第139集 1997 『大月遺跡』山梨県教育委員会
- ・清水端遺跡土偶 (第1図33) 宮沢公雄 1986 『清水端遺跡』明野村教育委員会
- ・後田遺跡土偶 (第1図34) 山下孝司 1989 『後田遺跡』韮崎市教育委員会
- ・石堂遺跡土偶 (第2図1、9、13、22、23) 雨宮正樹 1986 『西ノ原遺跡、石堂遺跡』高根町教育委員会、末木 健 1990 『先史・古代』『高根町誌』(上)
- ・中谷遺跡土偶 (第2図10、第5図9、21) 都留文化大学考古学研究会 1973 『中谷遺跡』都留市教育委員会
- ・水口遺跡土偶 (第2図16) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第191集 1994 『水口遺跡』山梨県教育委員会他
- ・城屋敷遺跡土偶 (第2図21) 都留文化大学考古学研究会 1983 『城屋敷遺跡発掘調査報

告書』西桂町教育委員会

- ・尾咲原遺跡土偶（第5図11） [余良泰史 1986 「尾咲原遺跡」『都留市史』資料編地史・考古 都留市史編纂委員会]の写真からスケッチ
- ・岡遺跡土偶（第7図1、2） 野沢昌康 1984 「甲斐・岡遺跡出土の容器形土偶」『山梨考古』14 山梨県考古学協会
- ・金の尾遺跡土偶（第7図4） 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第25集 1987 『金の尾遺跡、無名塚（きつね塚）』 山梨県教育委員会他
- ・坂井遺跡土偶（第7図3） 森和敏 1978 「縄文時代」『韮崎市誌』上巻
- ・福島県三貴地貝塚土器（第4図3～5） 森幸彦編 1988 『三貴地貝塚』福島県立博物館
- ・群馬県矢島遺跡土偶（第6図） 明和村教育委員会 1991 『矢島遺跡発掘調査報告書』

## 清里バイパス第1遺跡の陥し穴の若干の検討

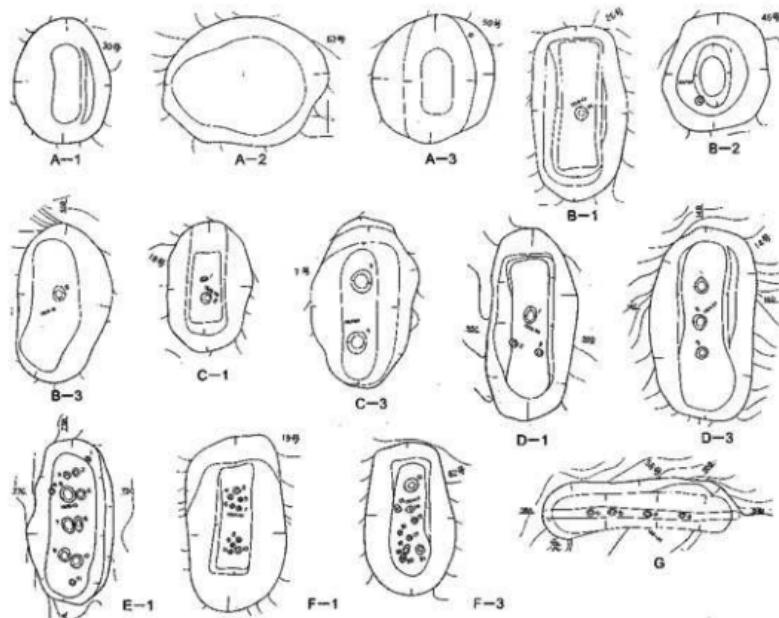
山本茂樹

- |                   |                           |
|-------------------|---------------------------|
| 1 はじめ             | 4 覆上から見た陥し穴の分布および陥し穴の重複関係 |
| 2 陥し穴の形態分類        | 5 G形態について                 |
| 3 各形態別の地形図より見た陥し穴 | 6 まとめ                     |

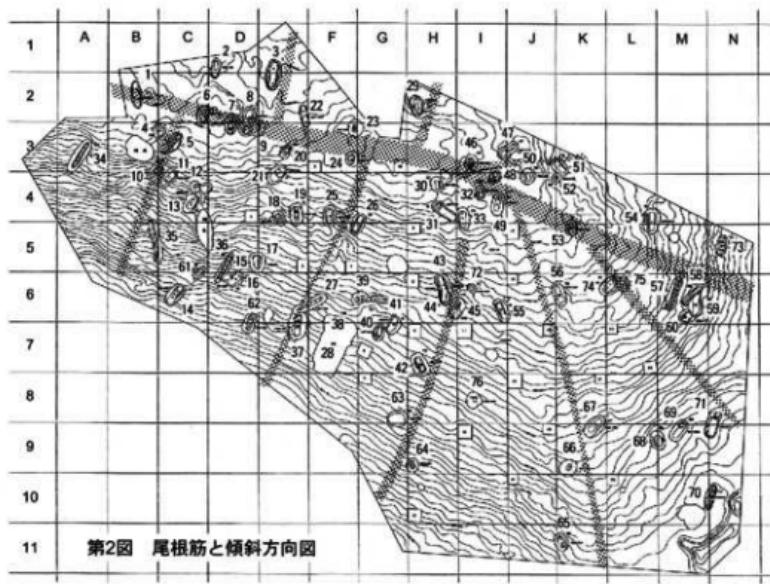
### 1 はじめに

1996年度の「清里バイパス第1遺跡」の発掘調査で、縄文時代の陥し穴と中世以降の陥し穴が発見され、『清里バイパス第1・第2遺跡』として報告されている。また本県では、広範囲にわたって調査された陥し穴は本遺跡がはじめてで、ほとんどが部分的な調査である。

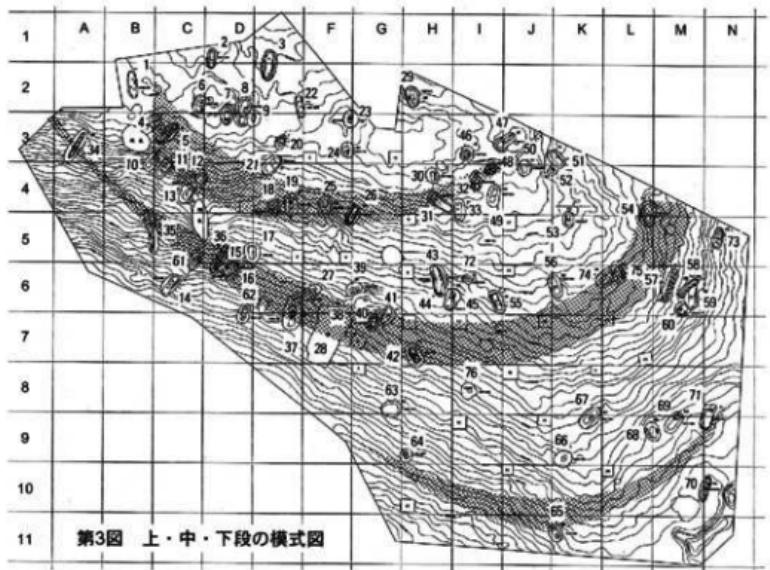
本遺跡で陥し穴が掘られた分布を見るとほぼ斜面全体につくられ、しかも尾根筋（第2図）や斜面の中段に多く見られるようである。更に細かく見ていくと、陥し穴が密集する箇所と散漫な



第1図 陥し穴の形態分類



第2図 尾根筋と傾斜方向図



第3図 上・中・下段の模式図

箇所に別れる。これは陥し穴の持つ性格からきているものであろう。この地は、現在森林地帯であり、その当時も木立が密集するところでもあったと考えられ、木立を避けて掘られたであろうことから、陥し穴が密集する箇所と散漫な箇所とに別れるのである。

また掘られた陥し穴も、一時期にこれだけの数、総数76基が掘られたとは考えがたいのであるが、しかし現実として時期を特定できる遺物の出土が認められておらず、陥し穴という遺構の性格上、遺物がほとんど出土しないのはいたし方のないことと思われる。

そこで陥し穴を一定の基準で分類するとともに、確認面上での覆土の相違や重複関係による長軸方向によって時期的な変化が認められるものかどうかを検討してみたいと思う。

## 2 陥し穴の形態分類（第1図）および各形態の分布図（第5. 6. 7. 8. 9. 10. 11図）

陥し穴の形態は、AからGまで分類することができる。分類基準は、床面にあけられた小穴の本数を基準として行った。これは、陥し穴の規模や上部の平面形態によってでは、木立を縫って掘られたであろうことを考えた場合、限られた空間内で陥し穴が掘られ、規模・平面形態ではとらえきれないと思われたからである。

まずA形態であるが、床面に小穴が認められないものとした。B形態は、床面に1本の小穴があけられているものとし、C形態は2本の小穴が床面にあけられているものとした。D形態は3本を基本としたもの、E形態は2本を1対として小穴があけられているものとした。F形態は、床面に小穴が多数あけられているものとし、G形態は細長い長楕円形のものとした。

各形態については、床面の形状から更に3分類が可能である。1類は、床面が長方形を呈するものとし、2類は円形を呈するもの、3類は楕円形を呈するものとした。各類の基準で長方形と楕円形の区別は外見上でを行い、計測値による区別では行っていない。なお、床面の形状で円形を呈するものは、楕円形のような特に長軸を長くとるものについては認められない。

A形態は、A-1類からA-3類まで分けられる（第5図）。

A-1類 NO30.31.69.71 (4基)

A-2類 NO21.63 (2基)

A-3類 NO9.50.68 (3基の計9基)

B形態については、B-1類からB-3類まで分けられる（第6図）。

B-1類 NO2.16.20.23.26.32.38.42.48.51.52.53.54.56.59.64.66 (17基)

B-2類 NO24.46 (2基)

B-3類 NO41 (1基の計20基)

C形態については、床面の形状で円形を呈するものは認められない（第7図）。

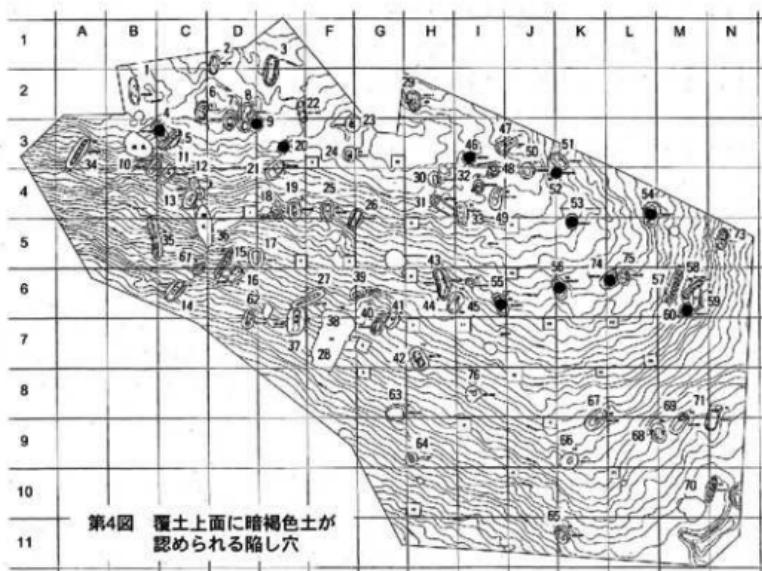
C-1類 NO6.15.18.25.37.49 (6基)

C-3類 NO3.7.11.17.39.43.44.60.61.72 (10基の計16基)

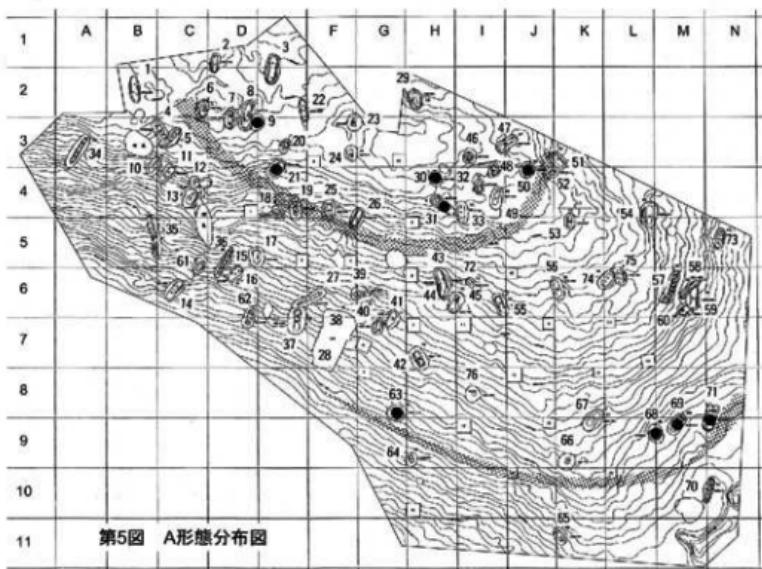
D形態は、C形態と同様で床面の形状で円形を呈するものは認められない（第8図）。

D-1類 NO22.33.55.75 (4基)

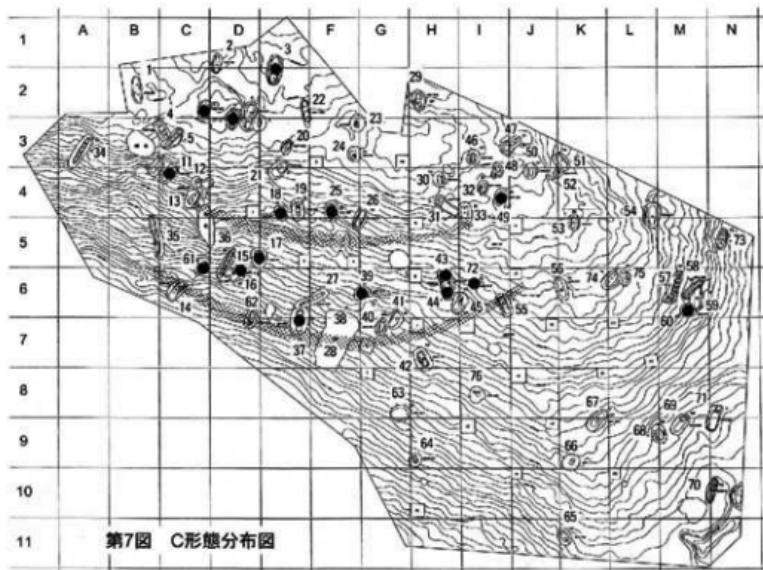
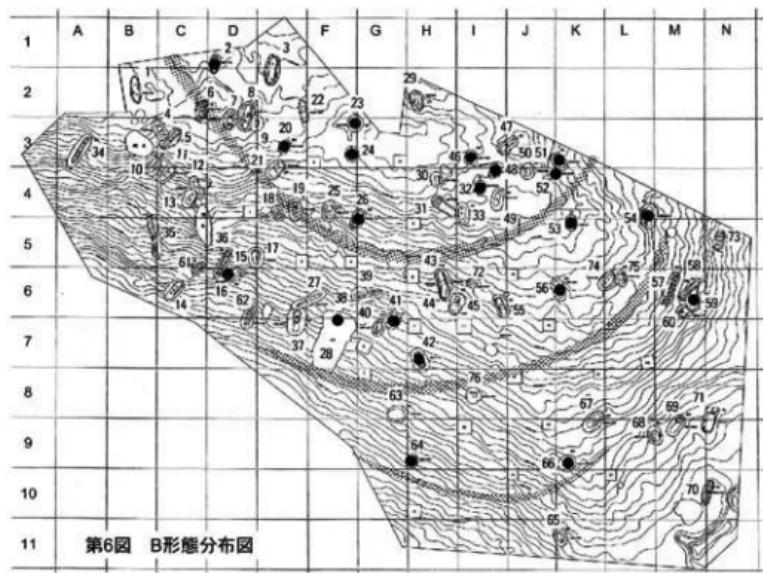
D-3類 NO8.12.14.40.65.76 (6基の計10基)

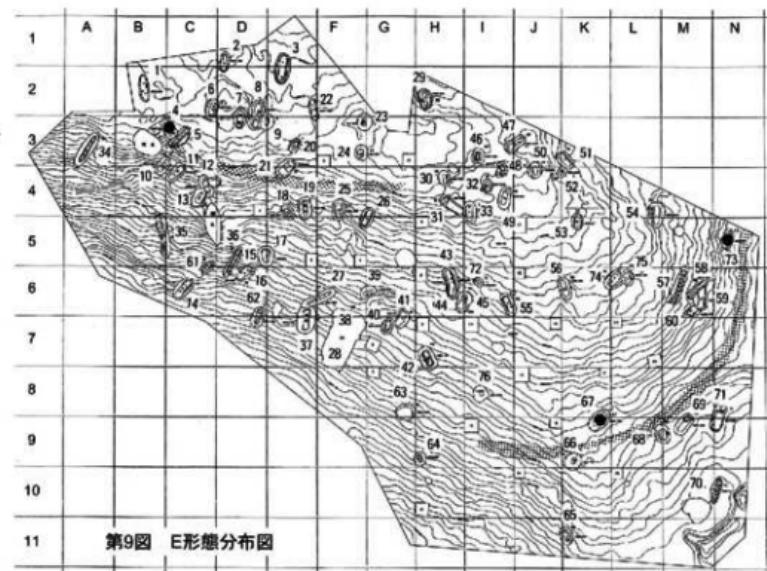
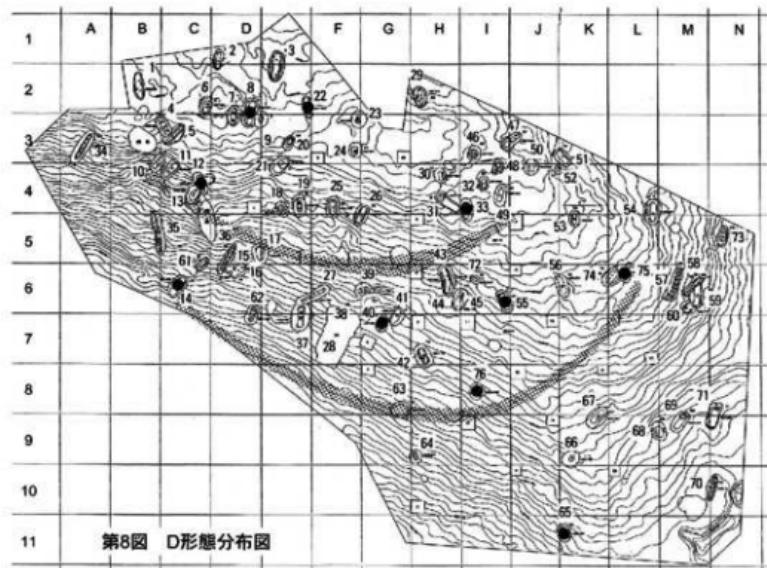


第4図 覆土上面に暗褐色土が認められる陥れ穴



第5図 A形態分布図





E形態は、ほとんど長方形を呈するものと思われる（第9図）。

E-1類 NO4.67.73 (3基)

F形態は、床面の形状で円形を呈するものは認められない（第10図）。

F-1類 NO10.19 (2基)

F-3類 NO1.13.29.45.47.62.74 (7基の計9基)

G形態は、平面形が細長いものとし、床面の形状が細長い長楕円形とした（第11図）。

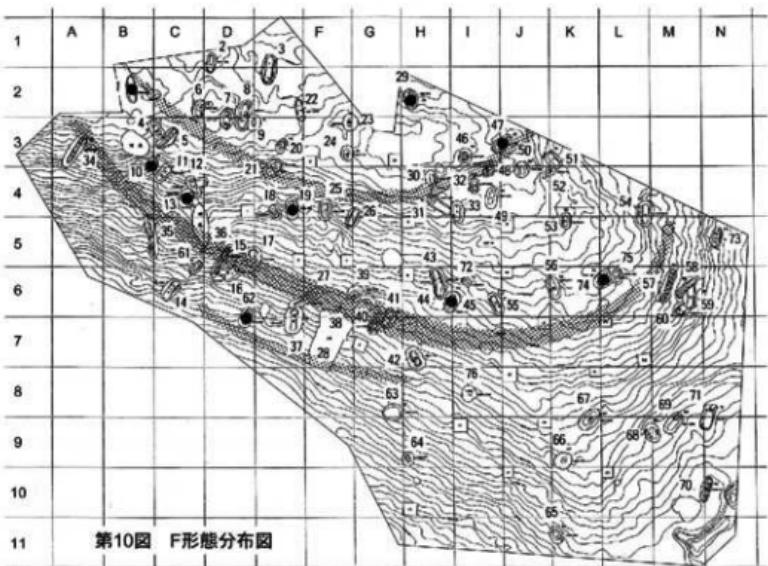
G-3類 NO5.27.28.34.35.36.57.58.70 (9基) である。

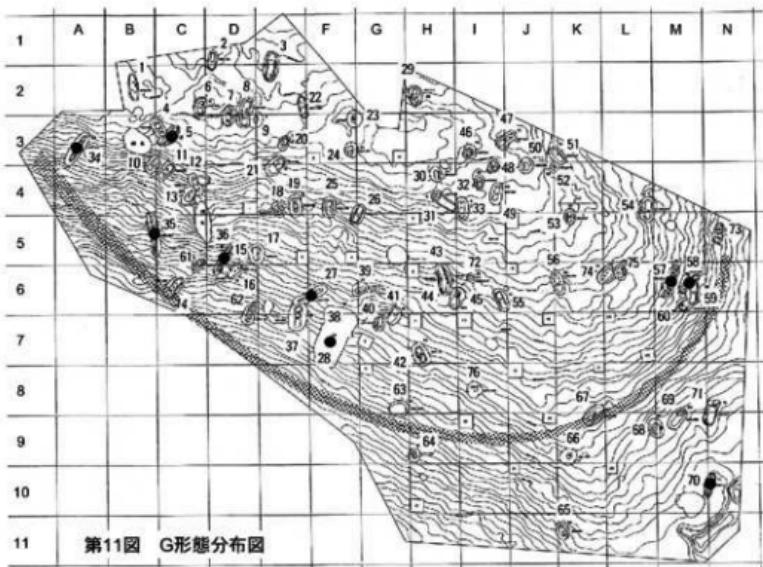
### 3 各形態別の地形図より見た陥し穴（第2・3図および第5～11図）

陥し穴全ての全体図を地形図に落としてみると、尾根筋から斜面部にかけて上・中・下段の3段に区分されるように見受けられる（第2・3図）。

まずA形態（第5図）については上段部に5基と下段部に4基が分布し、B形態（第6図）は上段部に10基、中段部に7基、下段部に3基が分布する。C形態（第7図）は上段部に7基と中段部に8基、下段部に1基、D形態（第8図）は上段部に4基、中段部に5基分布し、下段部に1基のみ分布する。E形態（第9図）は、上段部に1基と下段部に2基が分布し、F形態（第10図）は上段部に2基、中段部に6基の分布が認められ、1基だけ下段部に位置している。G形態（第11図）は、中段部に8基と下段部に1基の分布が認められる。

次に各形態別で長軸方向を見るとA形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するも





第11図 G形態分布図

のことがある。B形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するものがある。C形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するものがある。D形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するものがある。E形態では、斜面に対して長軸は直交する傾向が見受けられる。F形態では、斜面に対して長軸は平行する傾向がある。G形態は、東側では斜面に対して長軸は直交し、西側では斜面に対して長軸は平行するようである。

#### 4 覆土から見た陥し穴の分布（第4図）および陥し穴の重複関係

ここで陥し穴の調査中に、覆土上面の色調の記録を行った結果を記載しておく。

- 1-黒色土 2-黒色土 3-黒色土 4-暗褐色土（その下は黒色土） 5-黒色土（軟弱）
- 6-黒色土 7-黒色土 8-黒色土 9-暗褐色土（その下は黒色土） 10-黒色土 11-黒色土
- 12-黒色土 13-黒色土 14-黒色土 15-黒色土 16-黒色土 17-上面はローム（その下は黒色土） 18-黒色土 19-上面はローム（その下は黒色土） 20-暗褐色土（その下は黒色土）
- 21-黒色土 22-黒色土 23-黒色土 24-黒色土 25-黒色土 26-黒色土 27-黒色土（軟弱） 28-黒色土（軟弱） 29-黒色土 30-黒色土 31-黒色土 32-黒色土 33-黒色土
- 34-黒色土（軟弱） 35-黒色土（軟弱） 36-黒色土（軟弱） 37-黒色土 38-黒色土 39-黒色土（風倒木痕内） 40-黒色土（風倒木痕内） 41-黒色土（風倒木痕内） 42-黒色土 43-黒色土 44-黒色土 45-黒色土 46-暗褐色土（その下は黒色土） 47-黒色土 48-黒色土
- 49-黒色土 50-黒色土 51-黒色土 52-暗褐色土（その下は黒色土） 53-暗褐色土 54-暗褐色土 55-暗褐色土 56-暗褐色土 57-黒色土（軟弱） 58-黒色土（軟弱） 59-黒色土

60-暗褐色土（その下は黒色土） 61-黒色土 62-黒色土 63-黒色土 64-黒色土 65-黒色土  
66-黒色土 67-黒色土 68-黒色土 69-黒色土 70-黒色土（軟弱） 71-黒色土 72-黒色土  
73-黒色土 74-暗褐色土（その下は黒色土） 75-黒色土である（第4図）。

重複する陥し穴について新旧関係が明確なものは、NO8.9、NO51.52、NO58.59.60、NO74.75である。NO8.9ではNO9が旧く、NO51と52では52のほうが旧く、NO58.59.60ではNO60が一番旧く、次にNO59、そして次にNO58が掘られている。NO74.75はNO74が古い。この新旧関係と確認面での土層の色調を対比させてみると、色調では暗褐色土を呈しその下に黒色土が堆積するものが一番古い陥し穴と考えられ、NO4.9.20.46.52.53.54.55.56.60.74の陥し穴が該当する。

これらの陥し穴を△形態からF形態に当てはめていくと、A-3類にNO9の1基、B-1類にNO20.52.53.54.56の5基、B-2類にNO46の1基、C-3類にNO60の1基、D-1類にNO55の1基、E-1類にNO4の1基、F-3類にNO74の1基がそれぞれに該当する。B形態は20基（第6図）と数が多いためか6基の存在が認められ、特にE形態は、数が少ないにもかかわらず3基中1基が存在しており、床面の小穴の配列の上でも注目される陥し穴の形態であろう。

以上のことから、陥し穴が掘られた変遷を行ってみたい。

まず第1期陥し穴は、覆上面に暗褐色土を呈する11基のものと考えられ、そして各分類をおこなった△形態からF形態に含まれていることから、一時期に△形態からF形態が掘られたものと考えられる。分布を見ると、東斜面に多く認められるようであり、そして2基を1単位とするような感じが窺えそうである。このことは西側の分布についても言えそうである。

ただし、西側に存在するE形態（NO4）については、単独で掘られたものか、或いは斜面ということも手伝って上層の堆積土を造構の確認作業中に剥いでしまったのか不明であるが、近くにF形態（NO10）の陥し穴が存在しており、形態も良く似ている。また覆上面の色調は他と異なっているが、NO17.19は黒色土がロームを囲ったドーナツ状を呈するものであり、このような覆土をもつ陥し穴については、この2基のみしか認められていない。どのような状況であれば、このような堆積がなされるのか不明である。

重複関係を有する陥し穴のNO12.13について、この箇所では番号が付していない陥し穴がもう1基存在し3基が重複している。このことから陥し穴が掘られた時期は、少なくとも3時期あったのではないかと考えられ、そしてE形態が3基あり、そのうちの1基は第1期に掘られたことでも納得のいくところであろう。

以上のことから、遺跡内での古い陥し穴と考えられる遺構は、暗褐色土を覆土とする陥し穴で、また斜面に沿って長軸をほぼ直交させる傾向が窺える。尾根上に位置するNO9については、尾根筋を考えた場合東西への傾斜面に対して直交しているといえよう。NO15.16の重複関係で、NO16の方が古いというのは、このように長軸が斜面に対して直交する結果からであろう。また東側の一群で、31.33.47等は斜面に対して長軸は平行関係にあり、覆土の色調からも直交するものより新しいものであるといえそうである。西側の一群では、NO16.18.39が直交型で東側の一群NO46.53.54.67.69.71.73.74と共通するものがある。この様なことから、第1期は尾根筋と東側に掘られたものと考えられ、第2期はNO16.18.39.67.69.71.73と考えられる。第3期は、長軸が傾斜面に

対して平行する形態の陥し穴が掘られたものと思われる。その理由として、NO74.75を考えた場合NO74のほうが古いことから、NO75を掘る段階で既にNO74は埋まっていたことが想定されるとともに、この段階でNO75の長軸は、斜面に対して平行に近くなっていく傾向が窺えるのである。そして最終的にこの地では、時を隔ててG形態が掘られ、この形態以降陥し穴が掘られることはなかったものと思われる。

## 5 G形態について

本遺跡のG形態に属するものは、1989年度に発掘調査された『丘の公園第5遺跡』でも発見されており、陥し穴の覆土中に砾石が1点出土している以外、出土遺物は発見されていない。このことは本遺跡と同様で、陥し穴という性格上時期を決める手掛かりとなる遺物の出土はほとんど皆無という点はよく似ている。また報告書中では、掘削工具痕が見られる陥し穴が存在しているということであり、工具痕の部分を石膏による型取りが行われ、保坂康夫氏によってモデリング陽像が作成されており、このことについて考察が行われ、陥し穴の時期は古代以降の遺構として取り扱われている。

本遺跡のこのG形態は、『丘の公園第5遺跡』の陥し穴と同様な形態を有していること等から、時期的にも同時期に含まれるものと考えられる。細長い平面形態を有し、床面には6~7本の杭穴がほぼ等間隔に存在している点など良く似ている。またこの形態の陥し穴に共通していることは、覆土のしまり具合が軟弱であることであり、他のAからFの形態では、覆土のしまりが強く、全く異質のしまり具合である。そして床面に掘られた等間隔の小穴は、他の形態では認められてはいない。このことからG形態は、AからFまでの形態とは時期的に異なると考えられるのである。

G形態の細長い陥し穴の長軸方向を第II図から観察すると、まず西側の一群（6基）を取り上げてみた場合、斜面の傾斜方向に対して長軸を平行に持つものが多く認められるが、東側の一群（わずか3基ではあるが）については、西側の一群と全く異なった方向で斜面に対して直交するように長軸がとられている。特にこの形態については、斜面の傾斜方向に長軸を合わせるということではなく、本遺跡を全体的に見渡せば、G形態の長軸はおおよそ北方向に持つのではないかと考えられる。

そして西側と東側の陥し穴で、傾斜方向に長軸をとる西側の一群と、傾斜方向にはほぼ直角に長軸をとる東側の一群の存在は、時期的によるものかどうかを判断することはできないが、形態および覆土からすれば時期的な差は認められない。このことから長軸方向の取り方は、斜面に対して無関係に陥し穴が掘られたということになるであろう。このように長軸を南北方向にとるのは動物の行動・習性によるものであろうか。

また、本遺跡の斜面の傾斜角度は西側のほうが急となっており、東側のほうが緩やかであることからも斜面に対して無関係であるともいえる。ただし、西側の一群と東側の一群の中間には、このG形態の陥し穴は存在しておらず、この点に疑問を感じる。

細長い陥し穴の標高は、1307.2m ~ 1303.1m の範囲内にあり、特に1305m にその集中が認められ

る。形態で特記すべきものは、NO35・70である。まずNO35であるが、この陥し穴は長軸の北の壁にトンネル状の横穴が存在することである。この形態は、本遺跡においてただ1基のみであり、何故このような施設が存在しているのかは不明である。床面には、整然と小穴が7本並び、この点については他の細長い陥し穴と同様な形態を有する。覆土については、しまりの無いものである。そしてこのNO35は、千葉県『土気南遺跡群 III』(P123)の第3.9.10号土坑の施設と類似するものの、本陥し穴NO35では床面に小穴が掘られているが、千葉県の土坑では床面に小穴が掘られてはいない。これは地域的によるものかどうかは不明であるが、本遺跡では1基しか存在していない。

次にNO70であるが、この陥し穴は掘削中に礫がでてきたことによって、放棄せざるをえなかつたものと考えられ、陥し穴を掘削する過程を知ることのできる唯一の陥し穴であろう。掘削過程は、まず始めに長軸方向を決め陥し穴を平均的に掘り下げるによって形が決められ、次に南側部分の約1/3の掘り下げが行われたものと思われる。この段階では礫は認められなかったのであろう。そして北側を掘り下げる段階となって大型の礫が認められたことによって放棄されたものと考えられ、その結果、形態的には細長い陥し穴となり、床面には小穴があけられないまま放棄されたものと思われる。

## 6 まとめ

今回の陥し穴の調査では、覆土上面の色調や重複関係および斜面に対する長軸方向によって新旧を導き出すことが少なからず可能であった。そして掘削された1時期の陥し穴の数もある程度限定することが可能であった。また、古い時期に掘られた陥し穴はC形態を除いた他のA形態からF形態までの覆土上面に暗褐色土をもつ陥し穴が1時期に掘られたことはほぼ間違いないと思われこれを第1段階とし、2基以上重複する陥し穴の存在NO12.13と番号を付していない陥し穴の重複関係から、最低でも3段階にわたって陥し穴が掘削された可能性を考えられる。

本遺跡は、狩猟の場として陥し穴が掘られ、本遺跡からほぼ西側100mの地点（清里の森第1遺跡）には绳文時代中期中葉の藤内式期の住居跡が1軒ではあるが調査されており、本遺跡との関係を考える上で重要な遺跡となっていくものと思われる。

## （参考文献）

- 山梨県教育委員会『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告  
第14集 1986  
保坂康夫ほか『清里の森第1遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第32集 1987  
保坂康夫『丘の公園第5遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第56集 1990  
千葉市土気南上地区画整理組合・財団法人千葉市文化財調査協会『土気南遺跡群 III』1993  
山梨県教育委員会『清里バイパス第1・第2遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書  
第124集 1997



## 4基の前方後円墳の設計

—山梨県における—

森 和 敏

### 1 はじめに

### 1 はじめに

前方後円墳の設計に関する研究は多くの先駆によってなされている。小論はこれらの研究成果のうち、石部正志等によって提唱された16に区別する方法を用いて論を進める<sup>(1)</sup>。

テーマに上げた4基の古墳は、(1) 中道にある大丸山古墳(2) 同銚子塚古墳(3) 同天神山古墳と(4) 八代町にある銚子塚古墳である。これらの4基は比較的墳丘の残りがよく測量図があるかまたは試掘調査によって墳丘図が作成されており、設計されて築造したかどうかの検討が可能な形である。本県には、他にも数基の前方後円墳が発掘調査されたり、測量図が作成されているものもあるが、設計の是非を検討することが難しかったので割愛した。

4基の古墳のうち中道町の銚子塚古墳<sup>(2)</sup>と八代町の銚子塚古墳<sup>(3)</sup>の2基は復元整備のために復元設計図が作成されていて試掘調査が、前者は1983~85年に後者は1991~93年に行われており、続けて保存整備工事を実施し、現在は完成している。両者とも復元設計図は試掘調査の結果に基づいて作成されたものであり、従って築造当時になされた設計復元ではない。他の大丸山古墳と天神山古墳の2基に関する設計研究はないが、大丸山古墳については中道町誌(1975)で三木文雄がその主軸長について述べている。

小論では以上のこととふまえて、この4基の古墳が設計されていたのかあるいは設計された意図が窺えるかどうかを、あるとすればその意図を検証することを目的とした。

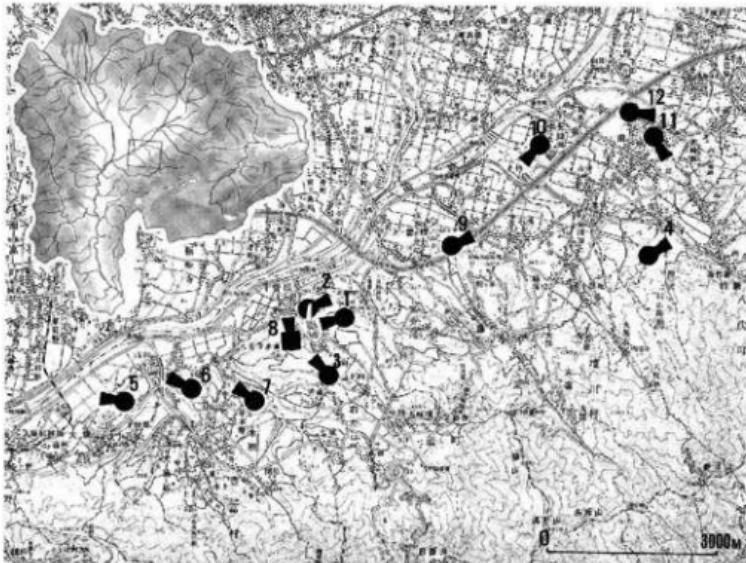
なお測量図の出典は、大丸山古墳は1976年に山梨県教育委員会によって作成された図を、中道町の銚子塚古墳は1983年に同委員会によって作成された図と註(2)に掲載されている第38図と第44図を、天神山古墳は1974年に中道町役場によって作成された図(中道町誌に掲載)を、また八代町の銚子塚古墳は註3に掲載されている第29図を使用させていただいた。また図は測量、製図、コピー等の際に生ずる全ての誤差はないものとしている。

### 2 4基の古墳の立地と状況(第1図)

本県の前方後円墳は前方後円墳と推定できる2基を入れると、全部で12基あると言われている。この内1基は甲府盆地西側にある一之瀬台地上にあり(柳形町物見塚)、他の全ては盆地の南東部にあって、南北ほぼ10kmの範囲内に存在している。11基の内7基は曾根丘陵上に(1基は中央

### 2 4基の古墳の立地と状況

### 4 おわりに



第1図 山梨県内前方後円（方）墳分布図（除櫛町物見塚古墳）

1. 大丸山古墳 2. 中道銚子塚古墳 3. 天神山古墳 4. 八代銚子塚古墳 5. 大塚古墳 6. 王塚古墳 7. 三里塚古墳  
8. 小平沢古墳 9. 馬糞山古墳 10. 八幡さん古墳（推定） 11. 須美塚古墳（推定） 12. 郡塚古墳

自動車道工事で破壊）、1基はその直下に、3基は浅川扇状地上に位置している。この他前方後方墳といわれている古墳が1基ある。このように本県の前方後円墳は現状では極めて狭い地域に集中している（第1図）が、かつては甲府盆地の沖積地にも少数の前方後円墳があったとも言われる。

（1）大丸山古墳 曽根丘陵から突き出した独立丘の頂上に占地している。墳丘は雑木林で覆われていて、見通しが悪い。後述するように所々で小規模な崩れがある。

（2）中道町銚子塚古墳 曽根丘陵直下にある緩やかな斜面上に占地している。1987年に保存整備が完了して、墳丘には芝生が張られ、周濠には玉石が敷かれて見学できるようになっている。整備する前の墳丘は若干の崩落や破壊の跡がみられた。

（3）天神山古墳 曽根丘陵はリアス式海岸状に盆地に突出しているが、当古墳はそのやや奥まった所にあって、舌状に突出した丘の先端上に広がる平坦な場所に占地している。墳丘は雑木林で覆われ、篠竹が密生している箇所などもあって、入ることが困難である。右前方部が大きく欠けているが、これは築造後北を流れる竜戸川による侵食で崩落したと考えられる。後円部右側から後側が大きい所は2~7mくらい削り取られている。この付近には古墳に食い入るように民家が建っている。

（4）八代町銚子塚古墳 曽根丘陵上にある広い平坦地の先端にあり、盆地側の墳丘斜面はそのまま丘陵斜面となっていて、周濠はない。1994年に保存整備が完了して墳丘には芝生が張られ、

周溝には玉石が敷かれて見学できるようになっている。整備する前の墳丘は果樹園になつていて、長い間の耕作によって表面は破壊され、土砂が流失していた。

### 3 設計

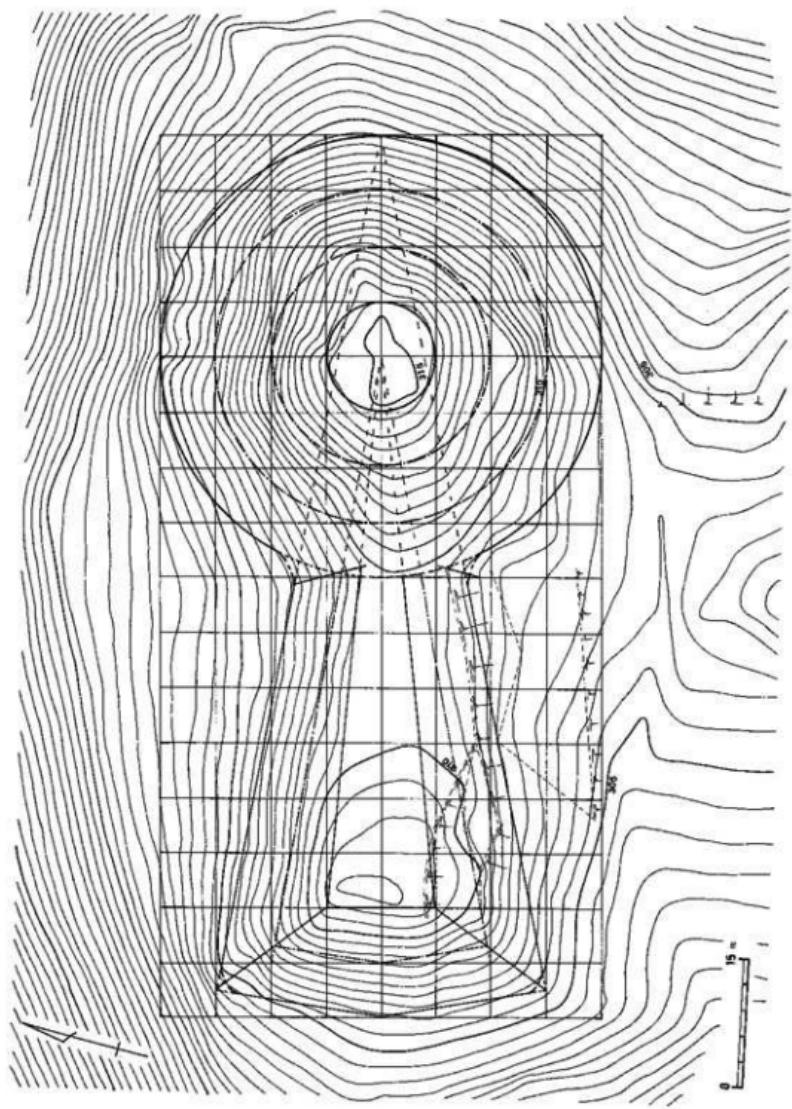
占墳の長さを決める中心線の位置とその方向を定めることと、後円部の中心点を中心線上のどこに置くかを見出すには、前方部先端・前方部前面の左右の陵線・前方部と後円部の接点や後円部後方の状況を総合的に勘案しながら決定した。各占墳の等高線を子細に見ながら、墳丘を検討すると、意外に微妙に、築造時の状況や意図を残していると考えられた。このような検討を重ねて16区割による方眼を4基の前方後円墳の図上にあてはめた。

16区割に基づいて古墳の大きさを晋尺（1尺24cm）で推定すると、中道町銚子塚古墳・天神山古墳・八代町銚子塚は後円部の直径が正数で割り切れる。後円部は全て8区であるから、前方部の設計も8区を基準とする（主軸長の基準を16区とする）と別表のような数字となり、うなづけるところがある。しかしだ丸山古墳は主軸長を確定することができなかつた。

(1) 大丸山古墳 (第2～4図) 主軸の長さは中道町史では99mまたは120mとしているものの、99mを有力視している。小論では第3・4図を参考にしたり、現地踏査などによって前方部や後円部の大きさを変えがら、幾通りかの全体図を描いて検討し、最終的に選択したのが第2図で、これによって主軸長を計算すると100.8mとなる。もし120mであるとすれば、後円部が大きくなるはずで、この数値も捨てきれないようと思われる。100.8mを晋尺で換算すると420尺となり、他の3基に比べると途中半端の数値である。120mなら500尺で96mなら400尺であるが、この数値は前述したように少しあげられる。大丸山古墳は晋尺（1尺24cm）を使わなかつたのかも知れない。墳端をさぐるために第3図と第4図に示したコンピューターグラフィックスを作成してみた。等高線は標高300mまでの線を入力したものである。前方部先端と後円部後方はどの図を見ても墳端らしい所は見当らない。第3図5の左と同図6の左には曲線がくびれ部左の標高308m～308.5m付近や、同じく右の304m～304.5m付近で少し変化する点がみられるので、くびれ部の接点とし、前方部墳端の両側線を決めるポイントとした。その他の図では墳端らしい箇所は認められない。

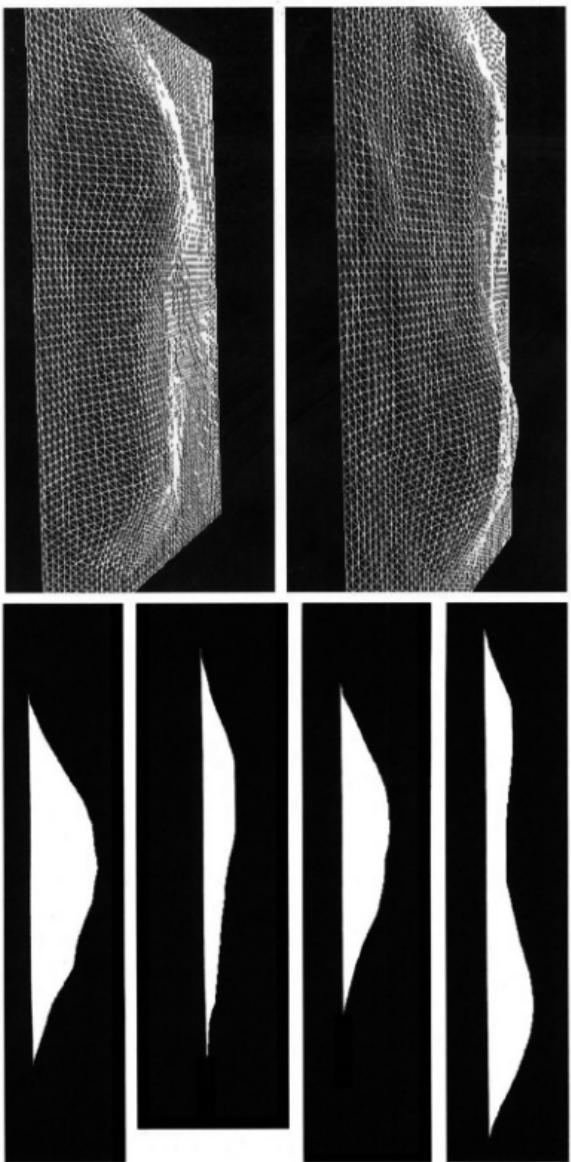
後円部の等高線は中心線方向の梢円形を呈し、一部の崩れたと思われる場所はあるが、全体的には等高線の乱れは少なく、特に後方は整っている。整っている範囲は墳頂から標高305m付近までであるので、墳端を決める一つの目安とした。くびれ部も比較的よく残っていて右側の付け根の山線は築造当時の形を残していると思われる。そこから前方部に向かって約10m、等高線が反対側の等高線と平行するように走っているのは、八代町銚子塚(第9図)のくびれ部と同様な設計になっているのかもしれない。前方部の墳頂から墳端までは等高線によって、また他の3基の古墳と同じように2区の長さと考えた。先端は等高線が剣先型になっているので、中道・八代町銚子塚のような剣先型と考えた。ただ中腹のテラス(破線)は確認はできないが、ここも剣先型としたが直線と考えることもできる。

以上のことを区割で記すと、前方部・後円部ともに8区をとり、主軸長は16区となる。16区に

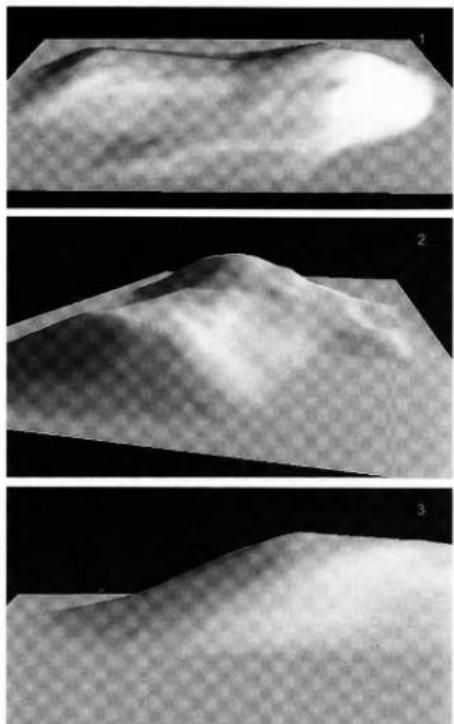


第2図 大丸山古墳 ( $S=1/750$ )

推定線  
接続線



第3図 大丸山古墳のコンピューターグラフィックス  
(山梨県工業技術センター 阿部正人研究員作製)



第4図 大丸山古墳のコンピューターグラフィックス図  
(製作者第3回に同じ) 1. 西から見る 2. 前方左から見る 3. 前方部全貌

それに近い墳形で造ったため、墳丘の左右の傾斜角が違うことになり、したがって斜距離も違うこととなる。特に前方部は左側が右側より急傾斜である。この古墳の設計を考えるとき、この傾斜角を考慮しなければならないが、築造当時現地で実際に繩張りを行った時に、これを考慮したかどうかまでは検討しなかった。

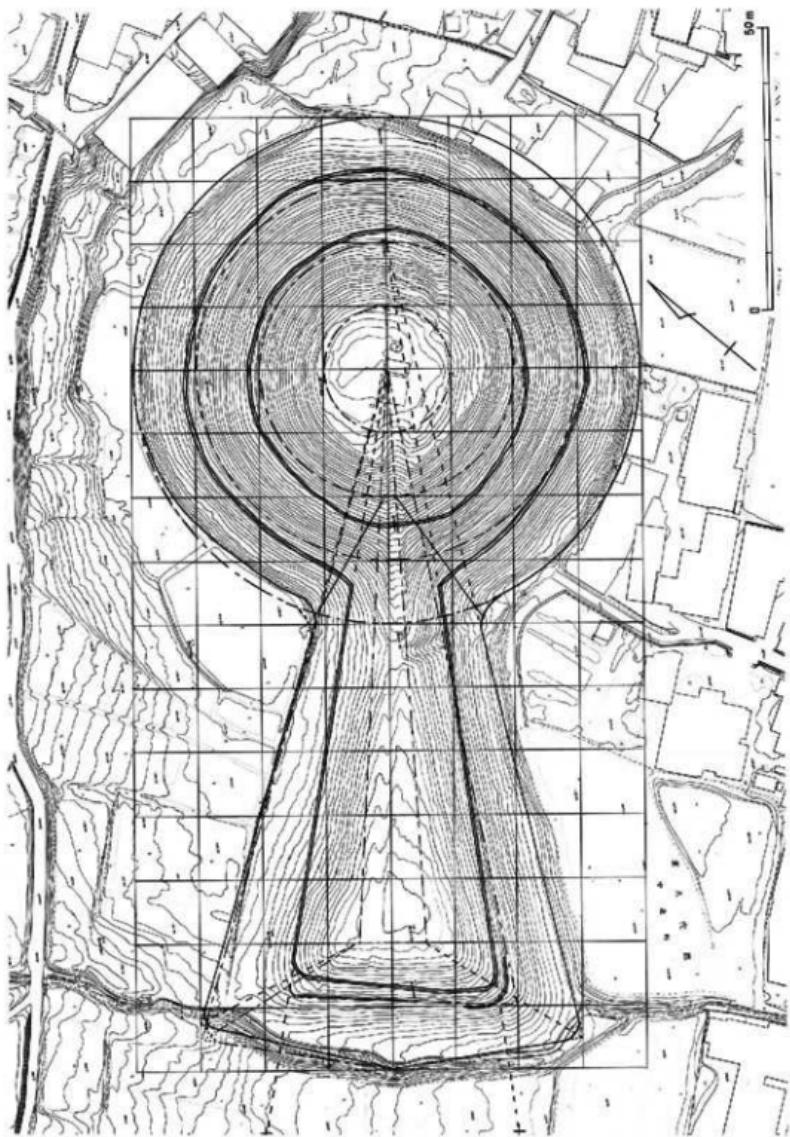
前方部は左右対称ではないと考えられる。右側の基底線と中段テラスの延長線は後円部の中心点で交わるとみられる。左側の基底線と中段テラスの延長線は、後円部の後から第2の横軸との交点で交わると思われる。ただしこの延長線が中心線と交わる点はわずかな角度の差によって違ってくる。試掘調査によって検出された基底線と中段テラスの線では前述の点で交わるとみられる。しかし試掘以前にみられたテラス状の地形（1部に石垣もこれに沿って積まれていた）とは若干の差があるが、どちらの線でも、くびれ部は左側は右側より広くなることになる。試掘前の線では、左側中段テラスの線（破線）は第5図のように、後円部の中心点と交わる可能性もある。試掘前には、前方部前面にもテラス状の地形とこれに沿って石垣があったが、試掘結果とは若干

なるのは4基の古墳のうち大丸山古墳だけである。他の3基と共に通する点は後円部の直径は8区、同墳頂の平坦面は2区、前方部幅は6区、同前面傾斜長と墳頂の最大幅は2区、前方部墳端の左右の両側線は後円部の後部中心で交わり、同上部平坦面の左右の両側線は後円部中心で交わる。前方部先端は剣先型と思われる。

表に示した墳丘の大きさを等高線でみると、海拔307.8mで主軸長99m、後円部直径47m、前方部巾34mとなり、海拔304.8mで主軸長120m、前方部幅52m、後円部直径は崩落しているため測定できないが、この付近から上部には葺石がある。海拔305mから306mで主軸長100.8m、後円部直径50.4m、前方部幅37.8mで、小論ではこの数値と考えた。

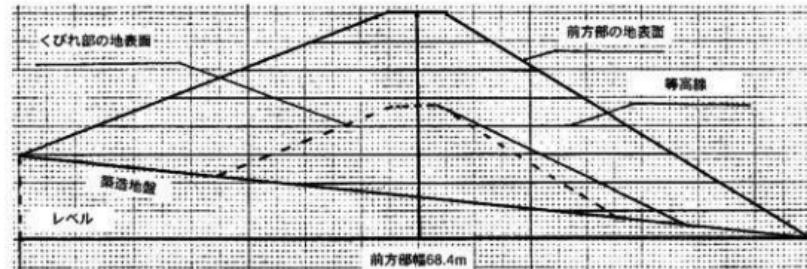
（2）中道町続子塚古墳（第5～7図）本古墳は緩やかな斜面に築造されていて、特に前方部がのる地盤の落差は大きくて、左側は右側より約5m低くなっている。ここに水平面上に作っ

たと同じように左右対称ではないが、



第5図 中道町銚子塚古墳 ( $S=1/1,000$ )

— 調査報告の線  
— 推定線  
- - - 車結線



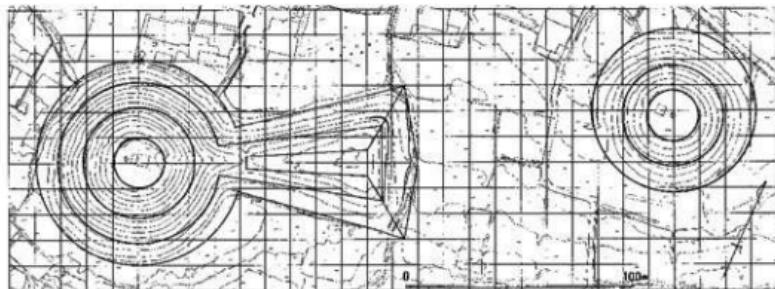
第6図 中道町銚子塚古墳前方部分正面図 高さ約1/500・幅約1/200

ちがい、この線も無視できないと思ってはいる。等高線といずれの中段テラスも前面は直線となっていて、前面墳端のように剣先型とはならないと思われる。前面墳端は試掘結果として剣先型になると坂本美夫は考えている<sup>(4)</sup>。等高線等の状況からみても、こう考えることが妥当のように思われる。ただ試掘の結果では前方部の隅角の位置が左と右で若干違うとみているが、左右対称とも考えられる。また試掘の結果では全ての隅角は曲線を描くと考えている。

前述した前方部が左右対称ではない理由をみてみると第6図のようだに、先端では左側と右側の斜面の傾斜角度が違うが、水平距離は同じである。しかしきびれ部では、左側の傾斜角度は緩くなり、水平距離も少し長くなっている。この長くなつた距離だけ、左側が幅広くなっているためである。地盤の傾斜も一樣ではないので、築造時の難しさもあったと思われるが、このような関係で左右対称にできなかつたのかも知れない。

後円部も左右の傾斜角度は違うが前方部程ではない。後円部墳端は右側の前方が少し小さくなっているが、他は円になっている。ただ2段の中段テラスは区割りやや大きく、前方部側が張り出している。この2つの円の中心点は墳端の円の中心点とほぼ同じとみられ、中心点は石室の南東隅を意識して設定しているようにもみえる。

以上のことを見割法でまとめてみると、主軸長15区、前方部長7区、前方部幅6区、後円部径



第7図 中道町銚子塚古墳と丸山塚古墳位置関係図

8区、後円部墳頂平坦部2区である。これを晋尺に換算すると、主軸長が700尺であれば表のようになる。後円部直径90m375尺、前方部長さ78m325尺となる。

なお、この外に周濠や石室が区割法によって設計されていないかを検証してみたが、現状では困難であった。

また、同じ平坦地上にある丸山塚古墳も含めて、区割で考えてみたのが第7図である。丸山塚古墳は試掘の結果によると、直径が墳頂平坦面は2区中段テラスでは4区であるが、中心点はやはすれ、墳端の円は大きさが区割よりやや大きいが、中心点は区割線の交点になる。

(3) 天神山古墳 (第8図) 本古墳は曾根丘陵を形成する舌状に突出した丘の先端にある平坦地に位置する。後円部の後方には円墳があったがほとんど破壊されている。

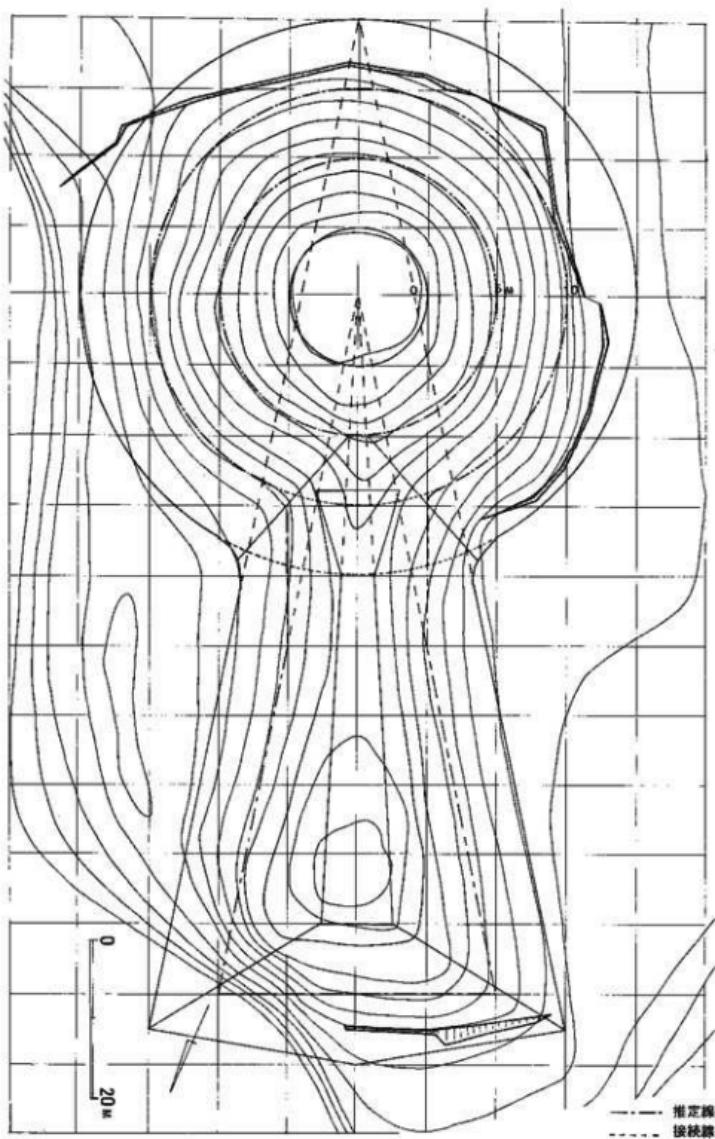
本古墳は右前方が約15m欠けている。この丘は140mくらいの古墳を築造するには充分広い平坦地があり、15mくらいなら、後退すれば完全な形を造ることができる広さがあるので右前方が欠けているということは、築造後戻戸川に崩落したものと考えられる。この図は等高線が1m間隔で疎であって、設計を検討するには不十分ではあるが、他の古墳の測量図のように、微妙に築造当初の様子を残しているので使用した。ただ前方部・後円部の中段テラスの線は推定したものである。

前方部先端を剣先形と考えたのは、左前方の等高線がやや弧を描いていることと、同左の隅角の陵線が剣先形になる位置と結ばれることと左前方部にある石垣とそれに続く法面もややそれに近い形をしているからである。くびれ部付近は比較的壊れが少なく、特に右側は入戻の状況が等高線でよく表れていると思われる。等高線で見るとくびれ部は両側が平行になるように見え、そうだとすると八代町銚子塚古墳に似ていることになる。

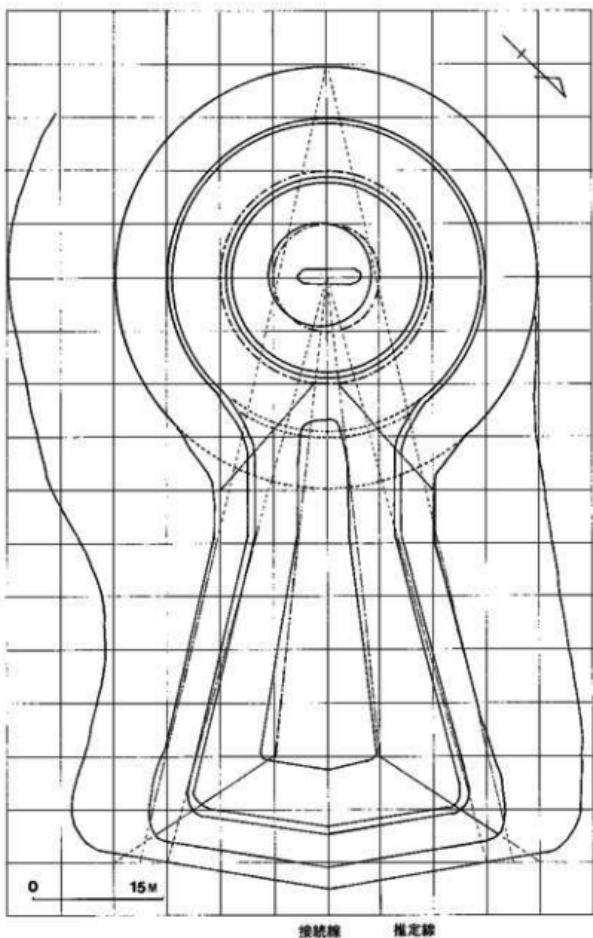
後円部の墳端は左側から後にかけて大きく削り取られているため、後円部の直径を推定するのが難しかったが、もし16区割で設計されたとするならば、第8図のように考えてみた。この図で削り取られた部分の長さを換算してみると2m~7mくらいになり、若干大き過ぎるようにも考えられる。前方部とくびれ部の状況をみると、八代町銚子塚古墳によく似ており、本墳の前方部幅が1区分広がると両墳は相似形になる可能性もある。

墳丘の長さを決ることは難しいが、16区600尺を基準とすると、後円部が300尺となり、前方部7区は262.5尺主軸長は562.5尺で、1区は37.5尺となる。メートルに換算すると主軸長は135mとなる。

(4) 八代町銚子塚古墳 (第9.10図) 曾根丘陵の先端にある。以下調査報告書によると、墳丘地盤の左右の落差は3mくらいある北面傾斜に造られていて、左側後円部斜面はそのまま丘陵斜面となっている。試掘を行った時には、墳丘の山(東)側は相当埋没しており、墳端の線では1m~1.5mくらい上で覆われていた。勿論周濠も埋まっていた。この覆土を全面除去しなかつたので発掘測量図は作成できなかったが、試掘したデータで復元図を作成したので、これによつて設計復元を試みた。前述したように墳丘の表面の風化が進んでいたので、遺構が確認できなかつた箇所もあったようであるので、発掘担当者の八代町教育委員会伊藤修二から試掘当時の状況を聞いた。それによると①前方部の中段テラスは3本のトレチの中にその平坦面らしい所があ



第8図 天神山古墳 ( $S=1/750$ )

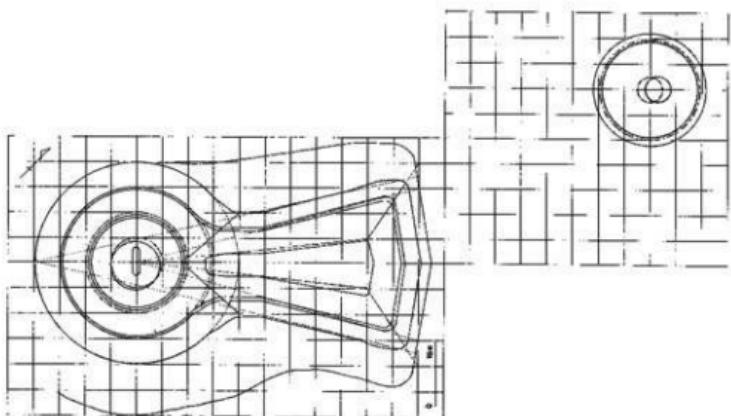


第9図 八代町銚子塚古墳 (S=1/750)

の結果に基づいて復元図が作成されている。

この復元図（第9図）を使って区割してみると、全体的には、想定線と復元線とに若干の差はあっても、おおむね合致しているといえる。前方部前部幅は7区の広さがあり、他の3基に比較して1区分だけ広くなっている。また中段テラスも5区の広さがあり、さらに前方部墳頂先端の平坦部も2区分の広さがあり、他の3基の占墳より両側に0.5区分だけ広くなっている。これだけ広いため他の3基の古墳よりずんぐりした形状に見える。前面は試掘の際には分別し難い地層

ったが確定ではなかったので、テラスは推定復元である。左右とも若干内側になるかもしれない。②右側くびれ部と前方部両端は曲線を描いていることを確認し、くびれ部は直線部分もあった。右くびれ部は壇石を扇形に区別けして、壇石面を構築し、湾曲をつくりている。③後円部と前方部の墳頂平坦面は開墾等によって破壊されていたため確認できなかつたので、中道町銚子塚古墳等を参考にして、推定復元した。④後円部では2本のトレントで下部のテラスを確認したが、上部のテラスは開墾等によって破壊されていて確認できなかつた。⑤墳丘の平面形の、ほぼ全体像をトレントで確認した。以上



第10図 八代町銚子塚古墳と盃塚古墳位置関係図

であったが、剣先状であると想定している。ただ中段テラスと墳頂については記述されていないが、剣先状になっている。中道町銚子塚の場合は直線である。他の古墳の今後の発掘調査が参考になるとを考えられる。くびれ部は前述したように両側が平行して描かれているが、中段テラスと墳頂部は破壊されていたため確認できなかったという。前方部の形は、前述した条件と墳端、中段テラスと墳頂部の側線が交わる点をどこにするかで決まるが、この古墳は後円部中心点とその後部となっていることが想定できる。後円部の墳頂平坦部とその下のテラスが若干想定線と違っているが、試掘では確認できなかった線である。なむ、主体部（粘土郭と考えられている）のほぼ中央が後円部の中心点となっていて、設計上考慮されたように思われる。周濠は後円部右側や他の部分でも設計されて掘られたような感じが少しするが、後円部後方が確定すればその全体状況が把握されそうである。

主軸長を報告書より2m短くとり、90mとすると、普尺に換算すると後円部直径8区200尺、前方部長7区175尺で主軸長375尺となる。設計基準を主軸長16区400尺とし、1区25尺とみることができる。

当古墳とその左前方にある盃塚古墳との位置関係を第10図に示した。両古墳との間隔は7区あり、中道町の2つの古墳との間と同じであるが、当古墳の1区を25尺とするとその間の距離は2分の1となる。盃塚古墳の墳端と周濠が描く円の中心は区割線の交点となるが、墳頂が描く円の中心とはずれている。墳頂は著しく破壊されていたので、明確にできなかったという。不確定な要素もあるが、中道町銚子塚・丸山塚古墳と同様に設計して築造した意図が感じられる。

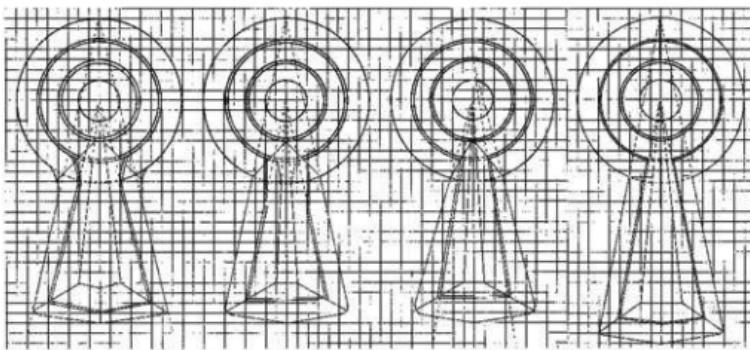
#### 4 おわりに（第11図）

本県の前方後円墳は全てが前期に属すると言われていて、この四基は西暦400年頃に築造されたと考えられている。大丸山古墳は堅穴式石室と石棺が二重構造になっており、中道町銚子塚古

墳は堅穴式石室、八代町銚子塚古墳は粘土郭をもつ。天神山古墳は発掘されていないと言われていて、主体部構造は不明である。

それぞれ4基の古墳は形がよく似ている。16に区割する方法で考えると、大丸山古墳は16区、他の3基は15区である。後円部にあると考えられる二通りの中段テラスは、中道町銚子塚古墳では二通りとも明らかにされて、区割とはずれた円となり、八代町銚子塚は下段テラスが区割と一致するが、上段は試掘では確認できなかった。他の2基は測量図だけではわからぬので推定線を入れた。前方部の平面形はその幅と長さで決まるが、それぞれ若干の差違が認められる。先端の幅は八代町銚子塚古墳は7区を、他の3基は6区をとると考えられ、前方部の長さは大丸山古墳は8区他の3基は7区をとる。幅の角度は両側の基底線とテラス線の延長が後円部のどこで交わるようにするかで決めたのではないかと考えた。中道町銚子塚古墳は右側の線が後円部の中心で交わり、左側はそれより後方で交わることは確かであるが、どの点で交わるように企画したかは明確にできなかった。他の3基のテラスの延長線は後円部が中心点で、基底線は後円部後方の中心線と円が交わる点に交点があるとみられる。また四基の全てが、先端は劍先型と考えられるが、テラスと墳頂の線は直線とみられる。また前方部前面墳頂から基底部までの斜面の長さは、全て2区としていることは確かである。その他細かい違いが図面上で少しみられるが、これは前述したように不明な点である。後円部と前方部との接続部はそれぞれ違い、八代町銚子塚古墳と天神山古墳はくびれ部の両側が一部平行するとみられる。前方部墳頂平坦面の幅は、大丸山古墳と八代町銚子塚古墳が先端を2区の広さにとっているようである。第11図は以上のような各古墳の特徴を見較らべるために、概念的に描いてみたものである。先にあげた各古墳の図を16区分にあわせたり、推定復元をした線もあるが、こうしてみると設計して築造した意図が窺え、また各古墳の共通点や異なる点特に前方部が観察できる。

築造したこの4基の古墳が設計にたいしてどの程度正確に施行されたかを知ることは難しい。発掘をして正確な測点を定めて、コンピューターシステムで測量した数値を元に復元設計すれば、その精度が確かめられると思われる。



第11図 4基の古墳の概念図

## 4基の古墳の計測値と推定値

(晉尺 1尺24cm)

	計測部	過去の計測値(尺, m)	小論の推定値			
			メートル(m)	尺(晋尺)	区数	
中道銚子塚古墳	主軸長	550尺169m	168	700	15	16区を設計基準とすれば3案が考えられる
	後円部径	285 92	90	375	8	
	前方部長	265 77	78	325	7	
	前端幅	210 68.4	72	279.9	6	
大丸山古墳	主軸長	99m又は120m	(1) 120	500		(1) 120m500尺中道町史 (2) 96m400尺案 (3) 100.8m420尺案・小論
			(2) 96	400	16	
			(3) 100.8	420		
	後円部径	47	(1) 60	250		
			(2) 48	200	8	
			(3) 50.4	210		
	前方部長	記載なし	(1) 60	250		
			(2) 48	200	8	
			(3) 50.4	210		
	前端幅	34m又は49m	(1) 52	124.99		
			(2) 36	150	6	
			(3) 37.8	157.5		
天神山古墳	主軸長	132m	135	562.5	15	16区600尺が設計基準か
	後円部径	67	72	300	8	
	前方部長	50	63	262.5	7	
	先端幅	29	54	225	6	
八代銚子塚古墳	主軸長	92	90	375	15	16区400尺が設計基準か1区25尺 ( )内は調査報告では明記していない
	後円部径	48	48	200	8	
	前方部長	(44)	42	175	7	
	先端幅	41	42?	175?	7?	

(註) 各古墳の計測値の出典

1. 大丸山古墳 「中道町史」 上1975年、中道町役場

2. 中道銚子塚古墳 「文部省史蹟調査報告第5輯」 1934年、文部省

「銚子塚古墳附丸山塚古墳」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書

第35集 1998年、山梨県教育委員会

4. 天神山古墳 「山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告書第8号」 1935年、山梨県

5. 八代銚子塚古墳 「岡・銚子塚古墳」 八代町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

1995年、八代町教育委員会

最後に大丸山古墳のコンピューターグラフィクスを作っていたいたい山梨県工業技術センター電子情報科阿部正人研究员を始め当センター大塚初重所長や御協力くださった方がたに深く感謝いたします。

(註)

(1) 「前方後円墳築造企画の基準と単位」『考古学ジャーナル』150号、1978 石部正志他

(2) 『銚子塚古墳附丸山塚古墳』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第35集 山梨県教育委員会

(3) 『岡・銚子塚古墳』 八代町埋蔵文化財調査報告書第9集 1996 八代町教育委員会

(4) (2) に同じ

## 八代町瑜伽寺遺跡および山梨市七日子 (廃寺) 遺跡出土遺物について

野代 幸和・鈴木 由香(甲府市教育委員会)

### 1はじめに

### 2 八代町瑜伽寺遺跡

### 3 山梨市七日子(廃寺) 遺跡

### 4 まとめ

### 5 おわりに

### 1はじめに

ここに報告するものは、山梨県埋蔵文化財センターで1992年度に実施した古代官衙・寺院詳細分布調査の際に出土した資料であるが、1995年に刊行された報告書には調査の目的上、掲載できなかったものをここで扱うことを記しておく。

### 2 八代町瑜伽寺遺跡

瑜伽寺遺跡は、東八代郡八代町永井に所在する。

本遺跡は甲府盆地の南東部、JR石和温泉駅より南へ約5kmの地点に位置し、標高295mを測る。御坂山地から甲府盆地に向かい北西に流れながら笛吹川にそそぐ浅川によって、扇状地や丘陵が形成されている。その扇状地の扇中部にあたる。御坂山地は東側で隆起が大きいため、扇状地を流れる川は西側に片寄っている。そのため、遺跡の北側を西流している天川は浅川扇状地と東に隣接する金



第1図 遺跡位置図

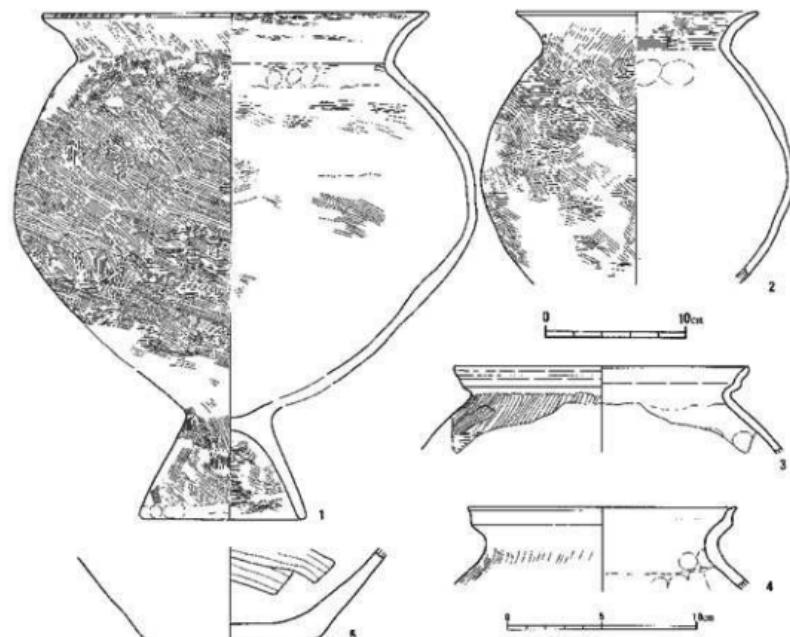
川扇状地のほぼ境を流れている。

本遺跡周辺には、縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が存在することで知られている。特に

古墳時代では、上ノ原（銚子原）の丘陵に岡・銚子塚古墳、壺塚古墳、上ノ平の丘陵に壺塚古墳、富士塚古墳など、非常に多くの前期古墳や後期古墳の分布が認められる。古墳以外では、壺ノ内遺跡、身洗澤遺跡などの古墳時代の遺跡が確認された。また、本遺跡が立地している永井は『甲斐国志』に長井と記載された例もあり、戦国期には長井郷と呼ばれていた。周辺には条里制の遺構がみられ、『和名抄』に八代郡の長江郷と八代郷の所在が記載されていることから、この地域が古くから栄えていたことが窺える。

第2図には古墳時代の土器を図示した。1が台付甕、2が甕、3・4がS字状口縁台付甕（以下、S字甕と記す）、5が甕の底部である。これらは、古墳時代初頭から前期に位置付けられるものである。

1は口径27.4cm、底径11.5cmを測る。胴部下端が一部欠損のため、器高は約36.0cmと推定される。色調は灰褐色を呈するが、口縁部内面に赤色塗布の可能性がある。口縁部に刻みを持ち、頸部にかけて「く」の字に大きく畠山する。胴部外面の調整技法はハケ調整を基本とし、下端に吹き零れの痕が見られる。内面には口縁部に横走するハケ目の上をナデ消したような痕が見られ、頸部には指頭痕が見られる。脚台部の下端には折り返しを持たない。2は口径17.0cmを測る。色調は



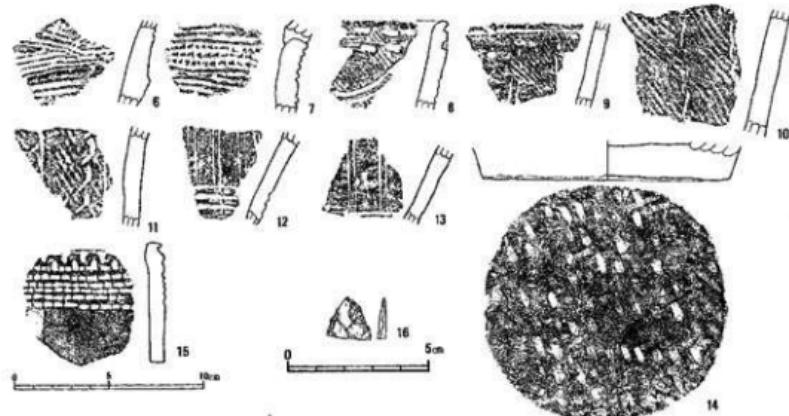
第2図 琉伽寺遺跡出土遺物

淡褐色を呈する。単純口縁で、1と同様に口縁部から頸部にかけて「く」の字に大きく屈曲し、胴部は球形を呈する。胴部外面にハケ調整が見られる。内面には口縁部から頸部にかけてのみ横走するハケ目が見られ、肩部には指頭痕と思われる痕が見られる。3は口径約15.5cmと推定される。色調は淡赤橙色を呈する。口縁部が緩やかなS字状になり先端は丸みを持っている。口縁部から頸部にかけての距離が短く肩部が強く張り出す。頸部外面にハケ調整が見られ、内面には肩部に指頭痕と思われる痕が僅かに見られる。4は口径約14.2cmと推定される。色調は灰白色を呈する。口縁部各段が明瞭となり先端が尖る。3に比べ口縁部から頸部までの距離が長くなる。胴部外面にハケ調整が見られ、内面には頸部から肩部にかけて指頭痕と思われる痕が見られる。5は底径約8.5cmと推定される。色調は外面が暗褐色、内面が淡赤橙色を呈する。内面はヘラ状工具による調整が施され、底部には木葉痕と炭化物付着の痕が見られる。

### 3 山梨市七日子（庵寺）遺跡

七日子庵寺は山梨市七日市場宇宮の平と塩山市二日市場宇乙川戸にまたがって存在し、甲府盆地の北東、笛吹川中流の左岸に沿う平野部の緩やかな傾斜地、標高約400m付近に立地している。昭和24年の調査では平安時代の居住跡が、平成4年の調査でもやはり同時代と考えられる配石遺構が発見されているが、寺に関係する遺構は発見されていないのが現状である。ここに報告するものは前述のとおり平成4年の調査で試掘坑から発見されたものであるが、绳文時代や古墳～平安時代の遺物が、七日子神社周辺から多く表面採集することができ、また「戦時に芋穴を掘った際に数多くの土器が出土し、子供たちが石を投げつけて壊して遊んだ」などの話が聞かれるところから、遺跡は神社を中心とした部分が主体を示す可能性がある。

第3図に示した遺物は、全て绳文時代の遺物である。6・7は前期末の諸穢式土器で、6は集合沈線文が施され、7は集合沈線文と結節沈線文で構成される。8～14は中期初頭の五領ヶ台



第3図 山梨市七日子（庵寺）遺跡出土遺物

II式上器である。8～11は縄文系の土器群で、8は口縁部で口唇部に棒状工具による刺す突文が見られる。9～11は胴部で、結節縄文と沈線文が施される。12・13は沈線文系の上器群で、これらは胴上部にあたり、横位と縦位に沈線が施される。14は底部で網代痕が認められる。15は土製円盤で、径が6.3×5.8cmを測る。16は小刺繡のある剥片石器で、15×1.6×0.3cmを測る。

#### 4 まとめ

瑜伽寺遺跡の立地する八代町には、前期古墳や後期古墳が数多く分布している。特に、本遺跡の南方1.6kmには、県指定史跡である岡・銚子塚古墳を代表とする古墳の分布が見られる。また古墳の周辺からは、該期に相当する遺跡もいくつか確認されている。しかし、このような恵まれた歴史的環境にありながらも、浅川扇状地における古墳時代の様相については未だ空白な部分が多いのが現状である。八代町に近接する曾根丘陵において上の平遺跡の方形周溝墓群や東山古墳群の銚子塚古墳などの存在から、弥生時代後期から古墳時代にかけて大規模な墓の築造がされていたことは明らかである。また、東山北遺跡の方形周溝墓や隣接する米倉山B遺跡からはS字型の出土例が認められた。このような周辺環境にあって、本遺跡からS字型の破片資料が得られたことは、八代町における古墳時代の様相や浅川扇状地と東山古墳群を築いた集団との関係を考え上で貴重な資料である。

七日子（庵寺）遺跡からは、縄文時代前中期～中期初頭段階に位置づけられる資料が発見された訳であるが、これらの遺物が意味するところは当地に該期の集落遺跡の存在が示唆されることである。また從来、縄文系と沈線文系土器群の併出例が非常に少なかったため、こうした事例に觸しても興味深いものである。周辺地域では、同市七日市場字宮ノ前前に所在する宮ノ前遺跡から縄文時代中期初頭段階の資料が出土していることが報告<sup>(1)</sup>されており、これから遺跡との関連性などについては今後の調査の進展に期待したい。

#### 5 おわりに

今回ここに示した資料は、興味深い資料でありながら今日まで公表が遅れてしまったことは筆者の怠慢であり、この文面をもって反省に代えさせて頂きたい。最後に実測を手伝って頂いた高野真寿美氏、ご教示を賜った市川恵子氏にはこの場を借りて謝意を表す次第であります。

##### （註）

- (1) 山梨県教育委員会『宮ノ前遺跡』山梨市文化財調査報告書 第3集（1995） 遺構には伴っていないが、縄文系と沈線文系の土器が出土している。

##### （参考文献）

- 山梨県教育委員会 『東山北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第79集（1993）  
山梨県教育委員会 『山梨県古代官館・寺院跡詳細分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第106集（1995）  
八代町教育委員会 『山梨県指定史跡 岡・銚子塚古墳』八代町埋蔵文化財調査報告書第9集（1995）

## 甲斐における古墳時代中期の墓制について

—曾根丘陵の円形低墳墓—

石 神 孝 子

- |              |          |
|--------------|----------|
| 1 はじめに       | 4 高塚との関係 |
| 2 曾根丘陵の円形低墳墓 | 5 まとめ    |
| 3 変遷         | 6 おわりに   |

### 1 はじめに

筆者は1994年6月から1995年3月までの約10ヶ月間に行われた東八代郡中道町に所在する岩清水遺跡の発掘調査において、円形の周溝を持つ低墳墓3基を調査する機会を得た<sup>(1)</sup>。

岩清水遺跡は、甲府盆地の南縁で、笛吹川の左岸に連なる曾根丘陵、その中でもとりわけ山石器時代から古墳時代にかけての遺跡が集中する東山の丘陵下に所在する。標高は260m前後を測り、傾斜変換点で丘陵に沿って東西に長く立地しており、付近には古墳時代前期に曾根丘陵の一角を成している米倉山の中腹には甲府盆地唯一の前方後方墳である小平沢古墳が、また東山の山頂に前方後円墳で、初期山背などの副葬品を持つ大丸山古墳が、それに継続して東山北縁の丘陵下に畿内の墓制を色濃くした前方後円墳の甲斐銚子塚古墳、及び大円墳の丸山塚古墳がそれぞれ立地している。そして中期にはそれらの系譜を引くと考えられるかんかん塚（茶塚）古墳が、さらに丘陵上には本遺跡と同様の性格を持つと思われる東山南(A)(B)遺跡が位置する。このような環境下で岩清水遺跡では、周溝内から古墳時代中期の遺物を出土する低墳墓2基、及び帰属年代不明の円形の周溝を持つ低墳墓1基の他に、弥生時代後期の住居跡13軒も確認されている。

今回の発掘調査によって、これまで稀薄であった古墳時代中期の墳墓、及びそれに伴う一括資料が得られたことは、東山古墳群の支配権の移り変わりを考える上でも、土器群の変遷を考える上でも大きな成果であった。しかしそれによって新たな問題が生じて来たこともまた事実である。これまで甲斐銚子塚古墳、丸山塚古墳、及びかんかん塚古墳等の高塚古墳が丘陵下に所在する一方で、東山南遺跡の円形低墳墓群が東山丘陵上に立地することは、被葬者集団の違いによる埋葬地の区別であると説明してきた<sup>(2)</sup>。これは言い換えれば丘陵下に墳墓を造営することは、畿内と密接であった甲斐銚子塚古墳の被葬者をはじめとする首長のみが行える、いわば一つの特権であったということである。ところが岩清水遺跡は丘陵下であるにもかかわらず、2基の円形の周溝を持つ墳墓が石室を持つかんかん塚古墳と近接して立地する上、墳墓の規模は第2号円形低墳墓が上回る。このように同時期の墳墓が複雑に立地する状況は、多様化する社会状況を映し出しているものと思われる。今回は岩清水遺跡や東山南遺跡群を始めとするこのような円形の低墳墓に着目し、整理することでその性格や高塚古墳との関わりについて考えてみたい。

ところで円形の低墳墓は、古くは弥生時代後期から見られ、古墳時代後期末の7世紀前葉まで

大きな形態の変遷をほとんど経ることなく存続する。その形態は基本的に円形で周間に溝をめぐらし、1カ所以上のブリッジを有するもの、あるいはブリッジを意識して内部主体を配置するもの等いくつかの類型に分類することが可能である。埋葬施設は低墳丘のため削平され、確認できない場合が多いが、横穴式石室普及前までは直葬及び石棺を用いた埋葬主体、横穴式石室普及後はこれを採用して営まれる傾向がある。溝内からは祭祀等に用いられたと考えられる遺物が出土する例が多数確認されている。主体部の周りに溝を巡らすという共通性から方形周溝墓との関連性を想定しがちであるが、時代背景等を考慮して、円墳に属する墳形であると考えられる<sup>(3)</sup>。このように円形の墳墓はこれまで円形周溝墓<sup>(4)</sup>、ブリッジ付き円墳<sup>(5)</sup>等いくつかの名称が付けられているが、未だ統一が図られていないのが現状である。このような状況をふまえて本稿においてはこれらの墳墓を円形低墳墓と一括して称することとする。

## 2 曽根丘陵の円形低墳墓

次に甲府盆地における古墳時代中期の円形低墳墓について整理してみたい。現在までに確認されている円形低墳墓は4遺跡14基にのぼり、その全てが曾根丘陵に立地する<sup>(6)</sup>。これらのうち遺物を出土したものを中心に、その概要を記しておく。

### ★上野遺跡<sup>(7)</sup>（西八代郡三珠町）

曾根丘陵南西端、標高300m前後に立地する。付近は曾根丘陵から甲府盆地へ向かってのびる舌状台地が連続し、上野遺跡もそのような台地の一つに立地している。周囲には人塚古墳、伊勢塚古墳等の5世紀の古墳が点在する。上野遺跡では古墳時代中期の円形低墳墓1基の他に、方形周溝墓5基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡14軒等が確認された。円形低墳墓は直径約20mを測り、北東に1カ所ブリッジを有するが一部削平されている。そのためか主体部等は確認されていない。

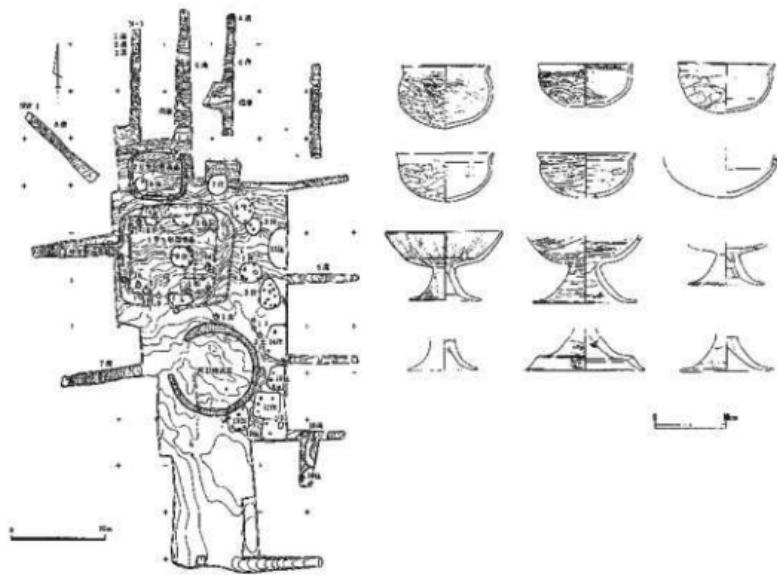
遺物は周溝内から土師器の高杯・杯等が出土している。高杯の有段脚部分は北側ブリッジ脇の周溝から他の遺物とともに出土したものである。さらに周溝東部分からも杯・高杯等がまとまって出土した。

### ★東山南(A)遺跡<sup>(8)</sup>（東八代郡中道町）

曾根丘陵を構成する東山の山頂付近、標高340m前後に位置する。8基の円形低墳墓と1基の方形低墳墓が確認されたほか、弥生時代後期末に位置付けられる2基の方形周溝墓が確認された。さらにすぐ北東の瘦せ尾根上には、ほぼ同時期の円形低墳墓2基が確認されている（東山南(B)遺跡）。東山南(A)遺跡では墳墓のほとんどが2カ所以上のブリッジを有している。K-1号墓の周溝内からは土師器の甕・杯等が、方形を呈するK-4号墓の周溝内からは8個体の土師器高杯と須恵器の把手付椀が出土している。とくに把手付椀は盆地内ではほとんど出土が知られておらず、遺構の年代を決定する根拠の一つとなっている。

### ★東山南(B)遺跡<sup>(9)</sup>（東八代郡中道町）

東山南(A)遺跡の北東の谷を隔てた一つ隣の尾根上に所在する。2基の低墳墓が確認されており、1号墳は東西15.9m、南北16.3mを測り、ほぼ円形を呈する。3カ所にブリッジを持ち、それらブ



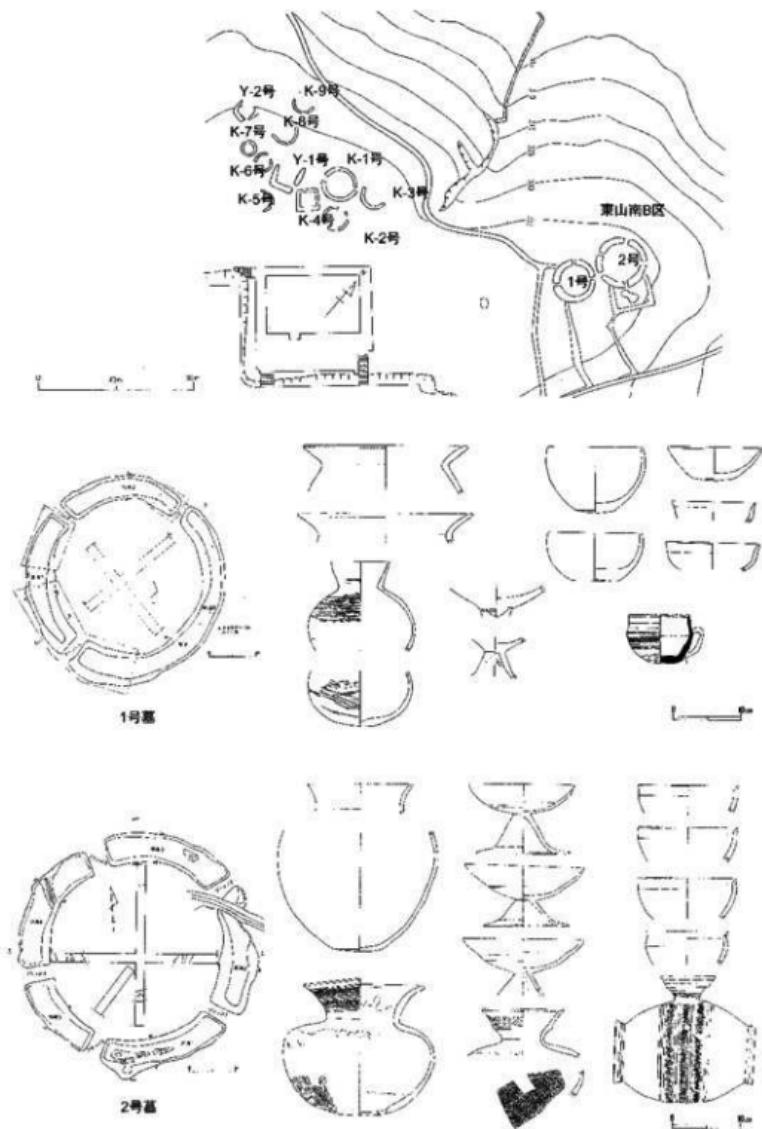
第1図 上野遺跡円形低墳墓及び出土土器

リッジ脇の周溝内からは須恵器の把手付椀を含む遺物がまとまって出土した。2号墳は東西18.3m、南北19.7mで、1号墳と同様にほぼ円形である。ブリッジを5カ所に持つ点が特徴的である。須恵器の樽型壺・壺の他、土師器の高杯・杯等が出土した。2基にほとんど時間差を見出すことは出来ず、ほぼ同時期の築造と考えられる。

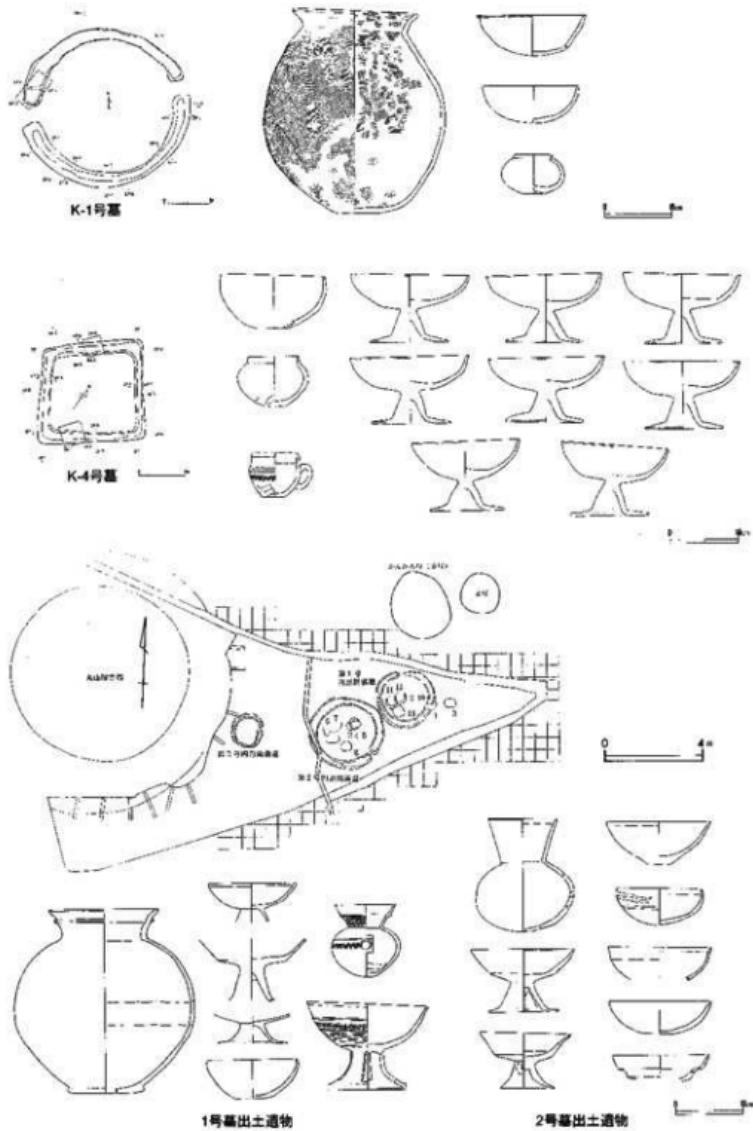
#### ★岩清水遺跡（東八代郡中道町）

前述したように東山南遺跡群の段下の、東山の傾斜変換点標高260m付近で、かんかん塚古墳の南側に所在する。3基の円形低墳墓が確認されたが、第3号円形周溝墓は東側にブリッジらしい遺構を検出することができたものの、他のものと比べて規模も小さく、まとまった遺物の出土はみられなかつたため、帰属年代を知ることは出来なかつた。

第1号円形低墳墓は周溝も含め直径26m、東側・北側及び西側に3カ所のブリッジを持つ。周溝内からは土師器の高杯・杯・壺の他、須恵器の壺・高杯が出土した。とくに須恵器類は細かく破砕され、周溝全体に散在して確認された。また上部器蓋は、口縁部の形態を須恵器壺を模倣して製作されたものと思われる。第2号円形低墳墓は第1号墓と同様に周溝も含め直径30mを測り、東側に1カ所のブリッジを持つ。周溝内からは土師器の高杯・杯・壺が多数、また複数の須恵器壺の口縁部及び胴部等が出土したが、全体の様相を窺うことが出来るものは存在しなかつた。これらの遺物から第1号・2号円形低墳墓は、ほとんど時間差を経ずして築造されたものと思わ



第2図 東山南(A)・(B)遺跡全体図及び東山南(B)遺跡1・2号円形低墳墓



第3図 東山南(A)遺跡K-1号墓・K-4号墓及び岩清水遺跡第1号墓・第2号墓

れる。

### 3 变遷

#### I 出土遺物による編年的位置づけ

円形低墳墓は弥生時代後葉から見られるようになり、やがて古墳時代中期後半から後期前半に最も盛んに築造される<sup>(四)</sup>。このような状況を群集墳に先立つ事例と考える向きもあり<sup>(五)</sup>、初期群集墳の成立を考える上でも大変興味深い事例であるが、初期群集墳の問題は稿を改めて触ることにする。

それでは古墳時代中期になって曾根丘陵に現れてきたこれらの円形低墳墓群は、いったいいつ造形が始まり、そしてどのような展開を見せるのか。周溝より出土した遺物の前後関係を明確にすることで、各々の円形低墳墓築造の変遷を整理することが出来ると考え、時間軸を設定した。第4・5図は曾根丘陵の円形低墳墓の周溝より出土した土器の編年試案である。

曾根丘陵の円形低墳墓は現在のところ古墳時代中期中葉から後葉のごく限られた時期にみられる。そしてそれらは出土土器により3段階に設定することが可能である。すなわち第1段階は須恵器登場直前の段階である。第2段階は現在のところ中府盆地では最も初期の須恵器が見られる時期で陶邑編年<sup>(六)</sup>のTK216型式併行期に位置づけられる段階である。第3段階はTK208型式併行期の段階である。

次にこれら編年試案を構成する上器の型式分類作業を行っておきたい。該期の土師器の器種構成は甕・壺・高杯・椀杯・鉢等に大別できる。この中で特に椀杯・高杯については器形をいくつかに分類することが可能である。

高杯A 杯部下位が有段もしくは明確な稜をもつもの。脚は八の字状で下部に稜を持つもの(A-1)・八の字状(A-2)・柱状(A-3)等が見られる。

B 杯部が椀形のもの。高杯Aと同様に脚には主に3タイプが見られる。

C 脚が有段化するもの。杯部が有段のものもある。

D 杯部が有段で、脚部は有段化しないもの。

椀杯A 口縁部が直立または丸く内傾するもの。口縁部内側に稜を持つものも見られる。丸底のもの(A-1)と平底のもの(A-2)があり深く、鉢を思わせるものもある。

B 口縁端部をつまみ上げ、若干内湾し、くの字状を呈するもの。ミガキの施されているものや底部が丸底及び平底のものがある。

それではこれらの器種と分類をふまえて、各段階ごとに見ていきたい。

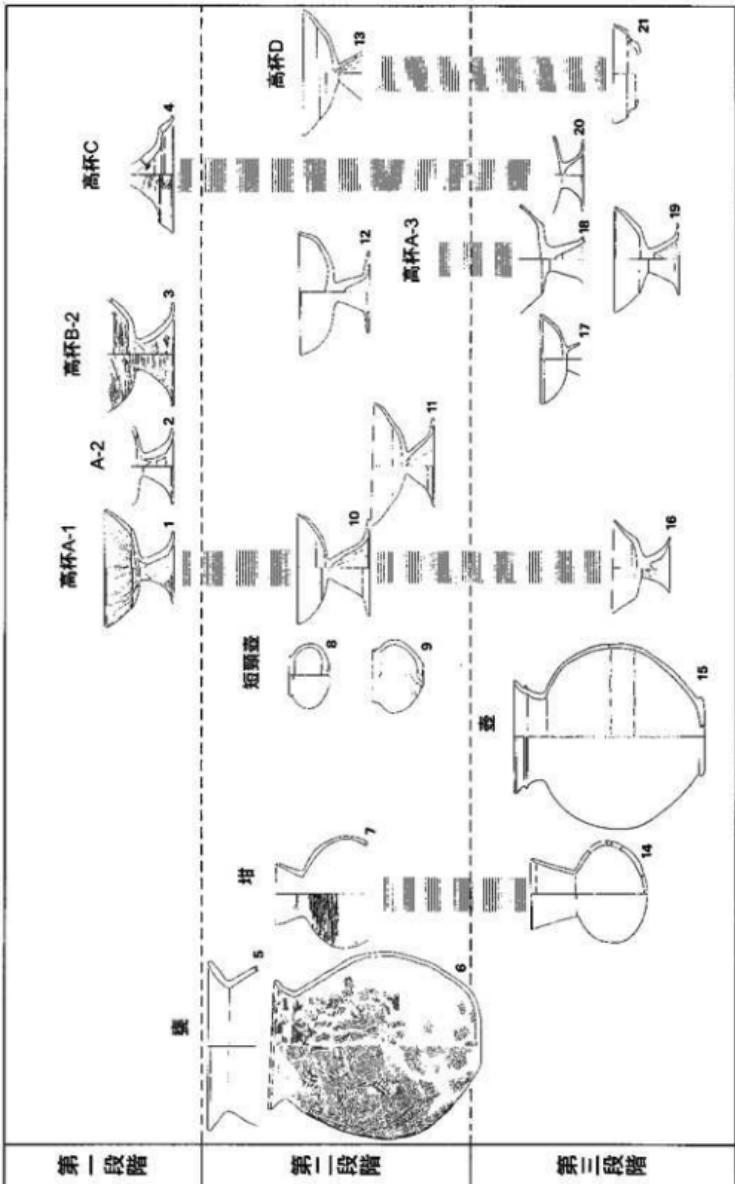
第1段階は三殊町上野遺跡の円形低墳墓が相当する。遺物は杯と高杯があり、それほど多いとはいえないが様々な型式が存在する。高杯はA-1・A-2・B-2・Cが、杯はBが共伴する。全体的に丁寧に調整を施しており、高杯A-1は杯下半部の稜を明確に持つなどそれぞれ器形にメリハリがある。

第2段階は東山南(A)・(B)遺跡の円形低墳墓群をあてることができる。甕はすでに長胴化が始まっている、内外面ともに粗いハケが施されている。壺は4世紀から見られる器形であるがやや短頭化し、肩部に最大径を持ち、梢円形を呈するようになる。この段階より短頭壺が見られるよ

うになる。須恵器の影響下で模倣された可能性がある。高杯はA-1・Bの変形・りが見られる。高杯A-1は杯下半部に明確な稜を持つものの、脚部と底部のメリハリが失われ、丸みを持つようになる。これらの高杯は短脚化が著しい。12は粗雑な作りが目立つ。またDは甲府盆地内では中期前半から見られる形である。脚部が有段化するCとは異なり、杯部に有段を持つこの器形は地城差があるようである<sup>(13)</sup>。杯部が大きく外傾し、有段は不明瞭である。次第に形骸化していく様子が見て取れる。杯はA-1・A-2・Bが見られる。墳墓出土のものに限らず杯はこの段階が定着期であると思われ、資料に偏りのあるものの数も増加する傾向にあるといえる。25は杯A-1に分類できる。丸底で口縁部は直に立ち上がるもの及び口縁部付近でわずかに内傾するものがあり、杯山現段階から見られる器形の一つである。また、30は大型で杯部が深く、鉢の影響を感じさせるものである。杯Bはより形骸化の様相を色濃くする。口縁端部は上方につまみ上げられ、内面に明確な稜を持つ。

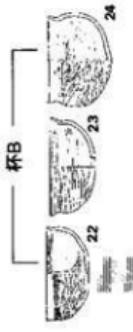
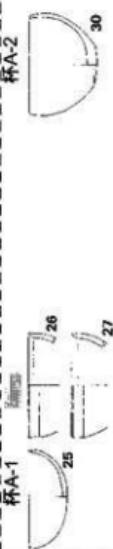
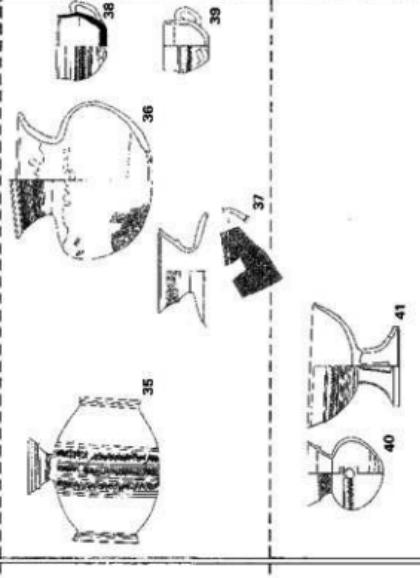
第3段階は岩清水遺跡の2基の円形低墳墓が相当する。14の壇は底部が小さく、ほとんど丸底に近い状態である。該期の住居跡出土上土器を概観しても、壇はこの段階から後はほとんど見られなくなる。また第1号墓から出土した15の壺は口縁部と頸部の間に一条の隆線を巡らしている。これは該期の須恵器壺の口縁部を模倣したものと思われる。高杯はA-1・A-3・B-2・C・D等比較的バリエーションが豊富である。だが細かく観察すると第1号円形低墳墓には短脚化したB-2が、また第2号円形低墳墓にはA-1がそれぞれ集中するという傾向が見出される。A-1は若干小型化し、杯下半部の稜は簡略化されてわずかに残っているといった状況である。脚部は大きくて開かなくなる。A-3は前段階において墳墓からの出土は見られないが、古墳時代前期から中期への過渡期の高杯から認めることの出来る、脚部が柱状化するタイプのものである<sup>(14)</sup>。この段階になると柱状であった脚部は退化して、短脚化もしくは若干八の字状に変化する様子が顕著である。B-2は全体的に小型化し、口縁端部は丸く意識的に下縁状になるのが特徴的である。20はCに分類されるものであるが、その脚部は短脚化するなどほとんど形骸化し、有段脚についても若干の段が確認できる程度である。21は有段の高杯であるが、やはり形骸化している。杯はこの段階においてほぼ器種が出揃うようである。A-1・A-2・Bが認められる。

次に須恵器について触れてみたい。第2段階の須恵器はTK216型式併行期に位置付けられるものと考えられ、甲府盆地では現在のところ最も最古の須恵器群であるといえる。甲府盆地においてはこれら初期須恵器の様相は依然として不明瞭で、なお資料蓄積の段階にあると言わざるえない。円形低墳墓から出土する須恵器は、土師器と比較してもその出土量は多いとはいえないが、割合に全体の様相のわかるものが出土している。第2段階の須恵器としては東山南(A)(B)遺跡の円形低墳墓群から出土した資料が挙げられる。樽型壺・把手付椀等この段階においては陶器同様それらの器種が未だ定型化していない様子が窺われる。第3段階は前段階と比較して徐々に定型化の進む時期である。円形低墳墓山田の須恵器に限らず、この時期のものを概観してみると樽型壺は消滅し、代わって壺の出土が目立ち始める。だが高杯の出土例はほとんど知られていない<sup>(15)</sup>。第2段階東山南(B)遺跡の第1号墳の把手付椀と第3段階岩清水遺跡第1号円形低墳墓の壺・高杯の出土状況は、周溝全体に破片が散在していたという点で共通している。伝統的な儀礼



第4図 円形低壙墓出土土器編年試案 (1)

第5図 円形低壠墓出土土器編年試案 (2)

第一段階	第二段階	第三段階
 杯B	 杯A-2	 杯A-1

が継承され、行われていた可能性もあり大変興味深い。

項の最後になるがここでそれぞれの段階に相当する実年代について触れておきたい。実年代については周溝出土の須恵器を基準に、陶邑窯跡群の編年による沿って決定した。近年、須恵器の登場年代はかなり引き上げられ、初期須恵器の占める時間幅は従来よりも長く設定されるよう意見も提出されている<sup>(16)</sup>。しかし甲斐においてはそれに該当するような須恵器の出土は現在のところ見られず、またそれに伴うような土師器の様相も明らかではない。そのため現時点においては、埼玉県福井山古墳出土の「辛亥」銘鉄劍の銘文から、同古墳出土のTK23~47型式に位置付けられる須恵器が5世紀内におさまるという白石太一郎氏の年代観<sup>(17)</sup>に従いたい。そこで第1段階は占墳時代中期の第2四半期に、第2段階は第2四半期後葉から第3四半期前葉に、そして第3段階は第3四半期後葉としたい。

## II 曽根丘陵における円形低墳墓の変遷

前項では曾根丘陵上に見られる円形低墳墓を出土遺物を中心に整理し、その変遷を明らかにした。そして3段階にわたって、円形低墳墓が造営されたことを確認した。現在のところ曾根丘陵は甲斐の他地域と比較して円形低墳墓の分布密度が濃く、墳墓が継続的に営まれたことを知ることができた。すなわち須恵器登場とともに、まず東山丘陵上に東山南(A)(B)遺跡の円形低墳墓群が、次段階にはそれらの系譜を引く岩清水遺跡の円形低墳墓群が丘陵下に降りてきて造営される。岩清水遺跡の円形低墳墓群は東山南(B)遺跡のものと比較して、規模が大きくなっている点に、存在感が増大する様相を見て取ることが可能である。

また円形低墳墓は墳丘の周囲に溝を持ち、その中には祭礼的な儀式を行った形跡を確認できる事例もある<sup>(18)</sup>。群馬県においては古墳時代中期までの墳墓には、埋葬主体内に上器を副葬する事例はあまり例がなく、土器の出土は主に墳丘あるいは周溝であることが指摘されている<sup>(19)</sup>。曾根丘陵のそれもこれらの諸条件とよく合致している。このような観点から考えると初期須恵器の構型を出土した中道町朝日無名墳<sup>(20)</sup>や、TK208型式併行期に位置付けられる鰐を出土した豊富村高部宇山平遺跡の円墳<sup>(21)</sup>等は、円形低墳墓である可能性を否めない。このような事例は円形低墳墓が決して東山一帯に集中するわけではなく、むしろ曾根丘陵に広く分布する可能性が高いことを示すものである。

## 4 高塚との関係～かんかん塚古墳と岩清水遺跡の円形低墳墓群を中心にも～

第3段階に位置付けられた岩清水遺跡の円形低墳墓群が、それまで所在した東山丘陵上から場所を移して丘陵下へ降りてきて造営されたことは前述したとおりである。そして岩清水遺跡の第1号円形低墳墓の北側約13mの隣接地点には、かんかん塚古墳が立地する。

かんかん塚古墳は茶塚古墳とも呼ばれ、直径約25mの楕円形を呈し、周溝は持たない。主体部は竪穴式石室をもち、そこからは鉄鋒や小札等の武具、輪鏡や三環鏡等の馬具が出土した<sup>(22)</sup>。

特に木芯鉄板張輪鏡は鏡の中でも古相を呈し、柄の頭部形態が円形で、全面を鉄板で覆うという特徴から、5世紀第3四半期に位置付けることが出来るという<sup>(23)</sup>。かんかん塚古墳からは須恵

	第2段階	第3段階
高塚		● かんかん塚古墳
円形低墳墓	目 目 東山南(A)・(B)遺跡	目 目 岩清水低墳墓群

第6図 曾根丘陵における高塚と円形低墳墓

器・土師器等の上器類の川土は見られず、また岩清水遺跡の円形低墳墓群からもかんかん塚古墳の副葬品と共に通する遺物は出土していない。このため出土遺物を直接比較することは出来ないが、このように見る限りかんかん塚古墳と岩清水遺跡の円形低墳墓群とはほとんど同時期に築造されたと考えてよいと思われる。

かんかん塚古墳は曾根丘陵に栄えた、畿内色を濃く受容した中斐鏡子塚古墳を始めとする、一連の系譜を引く古墳である。甲府盆地にはこの時期、東山一帯に限らず各地で古墳が造営されるようになる。多くの武具を副葬する全長61mの帆立貝式古墳である豊富村王塚古墳、鈴鏡・鈴鏡・甲冑等を副葬する全長70mのやはり帆立貝式古墳である三珠町大塚古墳等、豊かな副葬品を持つ古墳がその代表例として挙げられる。このような現象は、それまで東山一帯に集中していた権力が古墳時代中期になって拡散化し、地域中小首長等の新興勢力が台頭してきた結果と見られている<sup>(25)</sup>。

このような環境下において、高塚古墳と円形低墳墓という異なる墓制が隣接して造営されたのはなぜだろうか。墳墓の規模を比較してみても、低墳丘とはいっても岩清水遺跡の第2号円形低墳墓は周溝部も含め直径30m前後を測り、かんかん塚古墳を上回る。しかし規模は上回っていたとしても、石室形態や副葬品の内容から、その勢力はかんかん塚古墳が第2号円形低墳墓を凌いでいたと判断してよいと思われる。すなわち東山においては高塚古墳・円形低墳墓という墳形の上下の序列を見出すことが出来るのである。埼玉県埼玉古墳群では稻荷山古墳と二子山古墳の間に5基のブリッジをもつ円形低墳墓が確認されており、出土遺物からそれら大型古墳と円形低墳墓群とは、ほぼ同時期に存在したものであるという。この場合、円形低墳墓は5世紀後半代の社会構造の再編成の中で、地域の首長が直属の被葬者に与えることができた墳形であったとみなされている<sup>(26)</sup>。

残念ながらかんかん塚古墳と岩清水遺跡の円形低墳墓群との間にここまで明らかな従属的関係とでも言うべきものが存在したかは不明である。だが勢力の拡散化が進み、没落の一途をたどったかに見えるかんかん塚古墳は初期馬具等を入手する経路を持つなど未だ中央政権とのつながりを失っていない。その一方で、第2段階から東山一帯に登場してきた円形低墳墓群は、大陸からわたってきた焼き物である須恵器をいち早く入手することができた集団であることは確実である。この後、付近にかんかん塚古墳の系譜を引くと考えられる後続の古墳が認められないとの同

時に、円形低墳墓と同様の性格をもつと思われる後出の墳墓は確認されていない。これらの古墳は密接にかかわり合いながら新しい社会構造の中に組み込まれていったことは確かであると思われる。

## 5 まとめ

以上、円形低墳墓について出土遺物から、また周辺の高塚古墳との関係について若干の考察を試みた。円形低墳墓は三殊町上野遺跡および東山南(A)(B)遺跡の発掘調査以後、出土遺物とともに注目され、古墳時代中期について論じられる時には必ずといってよいほど触れられてきた。しかしその実態については不明な点が多く、今まで論じられる機会もあるようではなかったように思う。本稿は高塚古墳とは異なる、円形低墳墓という一つの独立した形態の墳墓の性格を整理し、明らかにしようとしたものである。しかし出土遺物の整理という点では遺物に限りがあり、また古墳時代中期全般のなかの一部分を切り取るような形で論を展開したため、片手落ちの理解になってしまった観がある。それでも曾根丘陵に所在する円形低墳墓の集造年代を3段階に位置づけ、古墳時代中期後半という限定された時間の中で、初めは丘陵上で営まれていた円形低墳墓群が、次段階には丘陵下でかんかん塚古墳に近接して造営されたその意味に若干ではあるが迫ることが出来たようと思う。

## 6 おわりに

先にも述べたように甲斐においては古墳時代前期には曾根丘陵東山一帯を中心に大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳など大型前方後円墳が造営されるが、一般に古墳が広大化する中期にはこれといった古墳が存在せず、その状況は混沌としており、研究課題も多く提出されている<sup>(25)</sup>。一方甲府盆地の西部、中巨摩郡甲西町大師東丹保遺跡で発見された盾形埴輪をもつ古墳<sup>(26)</sup>の裾部周辺から上器集中区が確認されており、それらは4世紀末から5世紀初頭に位置付けられている。これらを含め、今後はこういった墳墓と土器とのさらなるクロスチェックが必要であると思われる。

文末になりますが発掘調査時から稿を草するまで、坂本美夫氏には多くのご教示を賜りました。この場を借りて厚く感謝申し上げます。

(1998年1月3日稿了)

### (註)

- (1) 坂本美夫・石神孝子 「岩清水遺跡」『年報』11 山梨県埋蔵文化財センター 1995
- (2) 木本健ほか 「第IV章 考察 第1節 遺構」『東山南(B)遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第64集 山梨県教育委員会 1991
- (3) 白井久美子 「小規模古墳の一類型—ブリッジ付き円墳の検討—」『古代』75・76合併号 早稲田大学考古学会 1983
- (4) 筆者もかつて岩清水遺跡の年報執筆時には「円形周溝墓」の名称を用いていたが、周溝墓

という名称が方形周溝墓を意識させること、しかも現時点においては方形周溝墓と円形周溝墓とは形態的に異なるものであると考え、円形低墳墓という名称を用いることにした。

- (5) 註3に同じ
- (6) 東八代郡御坂町に所在する姥塚遺跡では、4基の円形及び方形の低墳墓と4基の無名墳が調査されている。前者の低墳墓群の中には、古墳時代中期の遺物を含むものも見られるが、共伴する遺物に時期差があるためここでは除外した。また後者の無名墳のうち第4号墳は出土遺物から1世紀後半に遡る可能性もあり、円形低墳墓の初現を探る上で興味深い。姥塚遺跡に隣接して甲府盆地では最大規模の横穴式石室を持つ姥塚古墳が所在し、姥塚・三宮遺跡と合わせてこの地域は古墳時代後期になって急激な勢力の台頭が認められるが、その基盤は前期の段階に形成されていたという意見も提出されている。  
末木健ほか『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第24集 山梨県教育委員会 1987
- 中山誠二「甲府盆地における方形低墳墓残存に関する考察」『甲斐の成立と地方的展開』角川書店 1989
- (7) 堀之内泉『上野遺跡』三珠町教育委員会 1989
- (8) 小林広和ほか『東山南(A)遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第76集 山梨県教育委員会 1993
- (9) 註2に同じ
- (10) 註3に同じ
- (11) 右鳥和夫「上野・下野地域の古墳群」『季刊考古学』第40号 雄山閣出版 1992
- (12) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1979
- (13) 比田井克仁「南関東五世紀十器考」「史館』第二十号 史館同人会 1988
- (14) 山崎金天ほか『西田遺跡－第1次発掘調査報告書－』山梨県遺跡調査団 1978  
B区第2号住居跡出土の高杯がこの時期に該当すると思われる。
- (15) 菊島(坂本)美夫ほか『大坪』山梨県遺跡調査団 1976  
橋本博文「甲斐出土のI～II期前半の須恵器」「丘陵」第7号 甲斐丘陵考古学研究会 1979 同時期の須恵器高杯の出土例が甲府市大坪遺跡で認められる。
- (16) 小山田宏一「近畿地方の歴年代の再整理」「考古学と年代」第40回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会 1996
- (17) 白石太一郎「年代決定論(二)－弥生時代以降の年代決定－」「岩波講座 日本考古学 I」岩波書店 1985
- (18) 宮坂光昭ほか『一時坂－長野県諏訪市一時坂遺跡第一次発掘調査報告書－』諏訪市教育委員会 1988
- (19) 坂口一「群馬県における須恵器出現期の様相」「考古学ジャーナル』NO.316掲載 ニューサイエンス社 1989
- (20) 東八代郡中道町朝日無名墳は周溝を持つ円墳である。発掘調査の結果、墳丘には若干の葺

石が認められた。中道町教育委員会 林部光氏のご教示による。

- (21) 岡野秀典 『高部宇山平遺跡Ⅱ・浅利氏館跡・三枝氏館跡』 豊富村教育委員会 1995
- (22) 小林広和ほか 『中斐茶塚古墳』 山梨県教育委員会 1979
- (23) 坂本美大 『馬具』 考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社 1985
- (24) 橋本博文 『甲府盆地の古墳時代における政治過程』『甲府盆地—その歴史と地域性—』 雄山閣出版 1984
- (25) 註3と同じ
- (26) 清水博 『山梨県の古墳時代研究の動向—甲府盆地を中心として—』『山梨県考古学協会誌』 第8号 1997  
宮沢公雄 「山梨県における古墳時代墓制の研究課題」『山梨県考古学協会誌』 第8号  
山梨県考古学協会 1997
- (27) 保坂和博ほか 『大師東丹保遺跡2』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第102集  
山梨県教育委員会 1995 古墳は直径36mの葺石を持つ円墳とみられている。

#### 第4・5回遺物の出典

上野遺跡 1~4・22~24 東山南(A)遺跡K-1号墓 6・8・25 K-4号墓 9・12・39

東山南(B)遺跡第1号墓 5・7・30・38 第2号墓 10・11・13・26~29・35~37

岩清水遺跡1号墓 15・17・18・20・34・40・41 第2号墓 14・16・19・21・31・32・33

1998年3月31日 発行

**研究紀要 14**

編集・発行 山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

印 刷 横河グラフィックアーツ株式会社

BULLETIN  
OF  
YAMANASHI PREFECTURAL  
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY  
&  
ARCHAEOLOGICAL CENTER  
OF YAMANASHI PREFECTURE

Number 14  
CONTENTS  
March 1998

A Circumstance of the Late and the Final Jomon period's Clay Figurine in Yamanashi  
Prefecture

Takeshi Niitsu

A Little Investigation about the Pitfall of Kiyosato Bypass Daiichi Site

Shigeki Yamamoto

A Design of Foty-one Keyhole-shaped Mounted Tombs in Yamanashi Prefecture

Kazutoshi Mori

About the Excavated Archaeological Remains at Yukaji Site, Yatsushiro Town and  
Nanahiko Site(Abolished Temple), Yamanashi City

Yukikazu Noshiro & Yuka Suzuki

About the Tomb Customs at the Middle Kofun Period in "Kai"  
- The Round-shaped Low Mounted Tomb in Sonekyuryo-

Takako Ishigami